佐久市埋蔵文化財調査報告書　第259 集

野馬窪遺跡群

野馬窪遺跡Ⅶ

長野県佐久市猿久保 野馬窪遺跡Ⅶ発掘調査報告書

2019.2

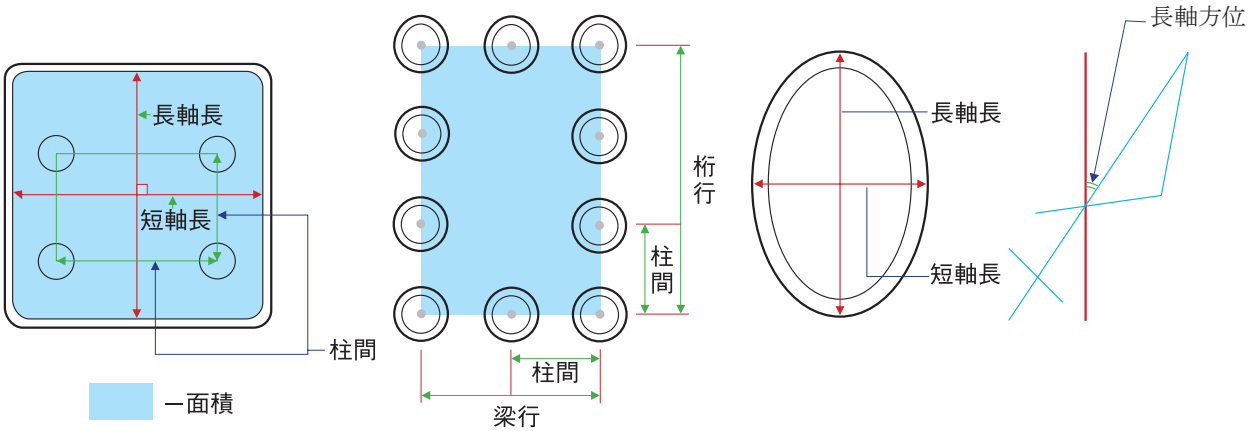
佐 久 市 教 育 委 員 会

例　言

1. 本書は長野県教育委員会が行う県立武道館建設に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査原因者　　長野県教育委員会
3. 調査主体者　　佐久市教育委員会
4. 調 査 地 点　　佐久市猿久保字野馬窪165番1ほか
5. 遺跡名及び面積　　野馬窪遺跡Ⅶ（ＳＮＫⅦ）　1543㎡
6. 調査・執筆担当者　　冨沢一明
7. 本書に掲載した出土遺物については佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

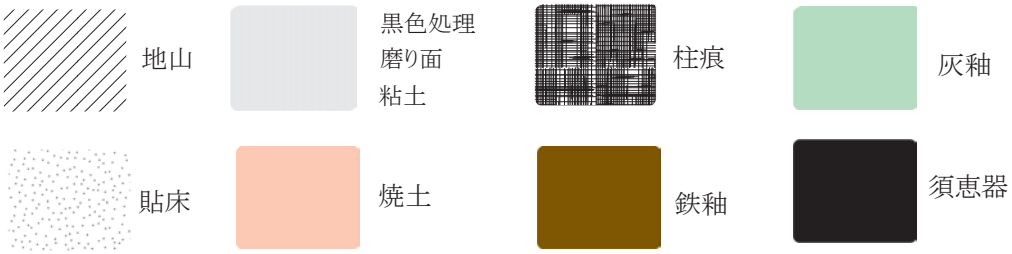
1. 遺構の略記号は竪穴住居址 -H、土坑 -D、溝状遺構 -M、ピット -P である。
2. 挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物で土器・石器 1/4、金属製品 1/2 を基本とする。それ以外のものは挿図中にスケールを記載した。遺物写真は挿図と同一スケールで掲載した。
3. 遺構の海抜標高は遺構ごとに統一し、水糸標高をスケール上に「標高」として記した。
4. 土層の色調は 1988 年版「新版　標準土色帖」に基づいた。
5. 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。（　）は推定値、＜　＞は残存値である。
6. 測量座標は世界測地系を用い、調査区グリットは公共座標の区割りに従い、間隔は 4×4mに設定した。
7. 遺構の計測値は下図に示した部分の計測値である。



住居･竪穴建物址　　掘立柱建物址　　土　坑　　長軸方位

・遺構計測表中の（　）は推定値、＜　＞は残存値。数値単位はmと㎡であり、その他は表中に記載した。
・遺構深度は数値の範囲を示しているもの以外は平均値である。
・住居址の形態は長軸長と短軸長の差が１割を超えたものを長方形とした。
・住居址の軸は長軸長より計測し、正方形の場合はカマド側を長軸とする。

8. 挿図中における網掛けは以下を示す。



目　次

例言・凡例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　第１節　調査の経緯　1
　第２節　調査体制　2
　第３節　調査日誌　2

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境
　第１節　自然的環境　3
　第２節　歴史的環境　4

第Ⅲ章　調査の方法
　第１節　調査の方法　7
　第２節　基本層序　13
　第３節　遺構と遺物の概要　13

第Ⅳ章　遺構と遺物
　第１節　竪穴住居址
　　(1)　Ｈ１号住居址　12
　　(2)　Ｈ２号住居址　14
　　(3)　Ｈ３号住居址　17
　　(4)　Ｈ４号住居址　18

調査区近景（遠方の山々は関東山地）

　第２節　土　坑
　（１）Ｄ１号土坑　21　（２）Ｄ２号土坑　21　（３）Ｄ３号土坑　21
　（４）Ｄ４号土坑　21　（５）Ｄ５号土坑　21　（６）Ｄ６号土坑　22
　（７）Ｄ７号土坑　22　（８）Ｄ８号土坑　22　（９）Ｄ９号土坑　22
　(10) Ｄ10 号土坑　22　(11) Ｄ11 号土坑　22　(12) Ｄ12 号土坑　22
　(13) Ｄ13 号土坑　22　(14) Ｄ14 号土坑　22　(15) Ｄ15 号土坑　22
　(16) Ｄ16 号土坑　22　(17) Ｄ17 号土坑　22　(18) Ｄ18 号土坑　25
　(19) Ｄ19 号土坑　26　(20) Ｄ20 号土坑　26　(21) Ｄ21 号土坑　26
　(22) Ｄ22 号土坑　26　(23) Ｄ23 号土坑　26　(24) Ｄ24 号土坑　26
　(25) Ｄ25 号土坑　26　(26) Ｄ26 号土坑　27　(27) Ｄ27 号土坑　27

　第３節　溝状遺構
　（１）Ｍ１号溝状遺構　27　（２）Ｍ２号溝状遺構　27　（３）Ｍ３号溝状遺構　28

　第４節　単独ピットと遺構外出土遺物　28

第Ⅴ章　調査のまとめ　36

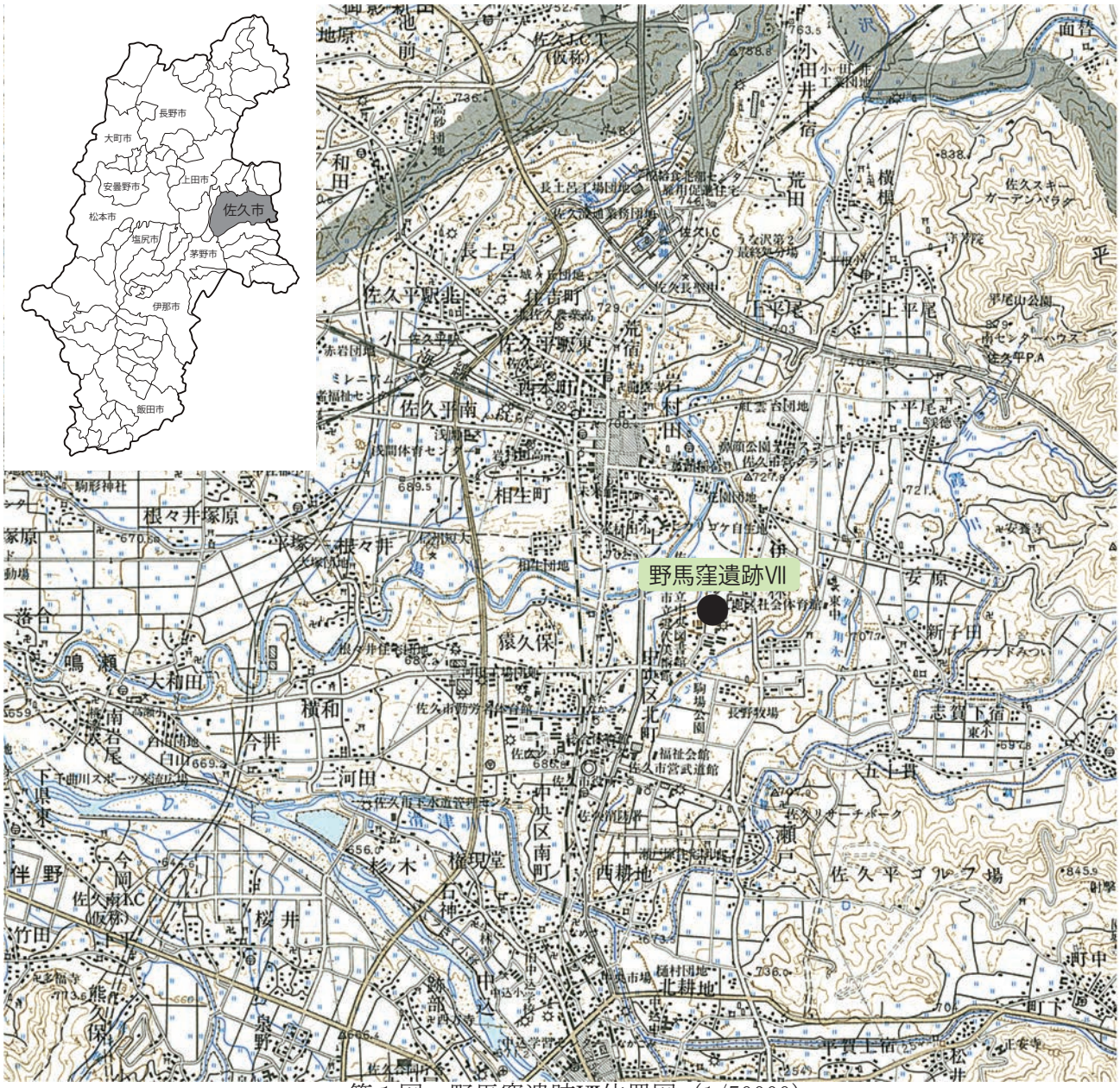
写真図版　遺構図版・遺物図版

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査の経緯

野馬窪遺跡Ⅶは野馬窪遺跡群のほぼ中央に所在し、標高 700mを僅かに越える台地西端に位置する。調査地点の地形は北から南へとゆるやかに傾斜する台地で、西側には湯川の河岸段丘が存在する。調査地点周辺は佐久市創錬センター建設や関連道路建設等で多くの発掘調査がなされている地域である。発見された遺構としては、古墳時代から平安時代の竪穴住居址や中世前期（13～14 世紀代）と考えられる方形で二重の溝に囲まれた館跡等が発見されている。

今回、長野県教育委員会により県立武道館建設が計画され、文化財保護法 94 条が佐久市教育委員会に届け出され、当該地の試掘調査が行われた。結果、建物建設予定地内から遺構が発見され、工事により遺跡に影響が及ぶ範囲については記録保存を目的とする発掘調査を行うことになり、佐久市教育委員会文化振興課において発掘調査が実施される事となった。



第１図　野馬窪遺跡Ⅶ位置図（1/50000）

第２節　調査体制

平成 30 年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長　　楜澤　晴樹
事　務　局	社会教育部長	青木　源
	文化振興課長	小林　義夫
	企　画　幹	武者　新一
	文化財調査係長	塩川　宏幸
	文化財調査係	小林　眞寿　　冨沢　一明　　上原　学　　久保浩一郎
		岩下　琴（平成 30 年６月まで）　荻原義治（平成 30 年７月～）
		森泉　かよ子（臨時職員）

調査担当	冨沢一明					
調　査　員	赤羽根篤	赤羽根充江	岩﨑重子	橋詰勝子	橋詰信子	堀篭保子
	木内修一	小林妙子	中澤　登	堀篭まゆみ	甘利隆雄	岩松茂年
	柳澤孝子	横尾敏雄	依田好行	小林敏雄	山田叔正	油井満芳
	浅沼勝男	比田井久美子	小幡弘子	羽毛田敏明	堺　益子	

第３節　調査日誌

平成 30 年

３月　１日　長野県教育委員会より 29 教ス第 220 号により土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法 94 条第１項）

３月 13 日　長野県教育委員会教育長より 29 教文第８-311 号にて通知。

４月　６日　長野県教育委員会スポーツ課と市教育委員会により保護協議が行われる。

４月 18 日　長野県教育委員会より埋蔵文化財発掘調査費の見積もりについての依頼。

４月 20 日　長野県教育委員会と埋蔵文化財調査の委託契約を締結。

５月　９日　野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅶとして発掘調査開始。
表土除去作業。機材準備。溝状遺構掘り下げ。遺構検出作業。
竪穴住居址・溝跡・土坑検出。遺構掘り下げ。記録写真撮影。

６月 29 日　発掘調査を終了し整理を作業開始。
室内作業開始。遺物洗浄、注記、接合、実測、原稿作成等を順次行う。

11月 20 日　原稿を入稿し、刊行まで順次校正を行う。

平成31年

２月 12 日　埋蔵文化財調査報告書　第259集刊行。
遺物・記録類の収蔵保管を行う。

表土掘削状況

遺構掘り下げ状況

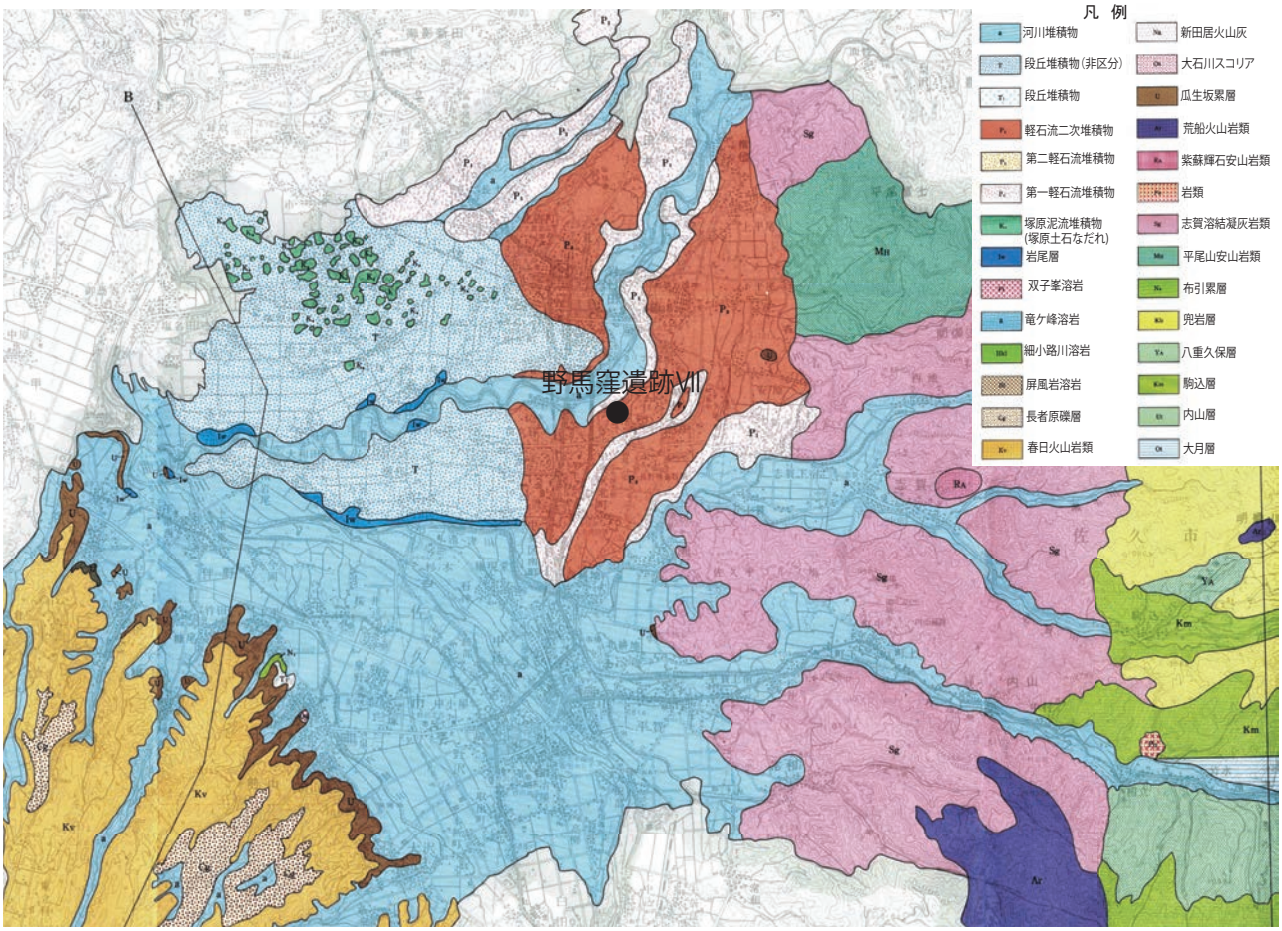
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　自然的環境

佐久地域は、周辺を山地や台地に囲まれた盆地状を呈する。標高は700m前後であり、夏涼しく、冬寒い高原性の気候を特徴とする。北には現在も噴煙を上げる浅間山が聳え、南には蓼科連峰が東西に連なる。東は関東山地が南北に連なり、群馬県との境をなしている。西には隆起地形である御牧原・八重原台地が広がっている。佐久盆地の中央には甲武信岳の山麓に水源を持つ千曲川が蓼科連峰や関東山地から流れ出た中小河川を集めて北流している。

このように、佐久盆地は周囲を山々に囲まれ幾多の河川に潤された大地が広がるが、地質学的にみると南北に大きく二分することができる。境界は関東山地より流れ出て、盆地のほぼ中央を西に流れる滑津川付近であり、滑津川と千曲川が合流する付近では北部地域との比高差は 20m内外を示す。ここを境として北部地域は浅間山から広がる山麓が緩やかに傾斜する地形で、浅間山の噴火によって堆積した火砕流や火山灰により形成された台地が広がっている。この台地は雨水等の浸食に弱く、浅間の麓から放射状に幾筋ものいわゆる「田切り」と呼ばれる谷が伸び、切り立った崖により台地を細長く分断している。これとは対照的に、南部地域は千曲川の氾濫原とする沖積地や滑津川や志賀川といった中小河川により形成された谷口扇状地が広がっている。このため、地表下は河床礫層と沖積粘土層が広がり、現在では佐久地域の穀倉地帯となっている。

今回の調査地点は湯川南側に広がる軽石流二次堆積土に覆われた台地上に位置する。この軽石流二次堆積土は径２～３㎝の大粒の軽石が多く混入する土で、非常に水はけが良い特徴を持つ。



第２図　佐久市地質図（佐久市志　自然編より　一部改編　）

第２節　歴史的環境

今回調査した野馬窪遺跡群が位置する佐久市の北部は、上信越自動車道や長野新幹線等の建設、それらに関連する開発等で 1980 年代より大規模な発掘調査が相次いだ地域である。それにより膨大な埋蔵文化財資料が蓄積されており、ここでそれらを概観したい。

まず、旧石器・縄文時代であるが、これらの時代は調査面積に比して資料が非常に希薄な時代である。近津遺跡群から縄文後期の土器・石器群は出土しているが住居址は発見されていない。また、湯川沿いの寺畑遺跡からは市内で唯一まとまった資料として草創期の爪形文土器が出土している。縄文期の集落が発見されているのは、関東山地の山裾や千曲川を挟んで蓼科山麓側である。

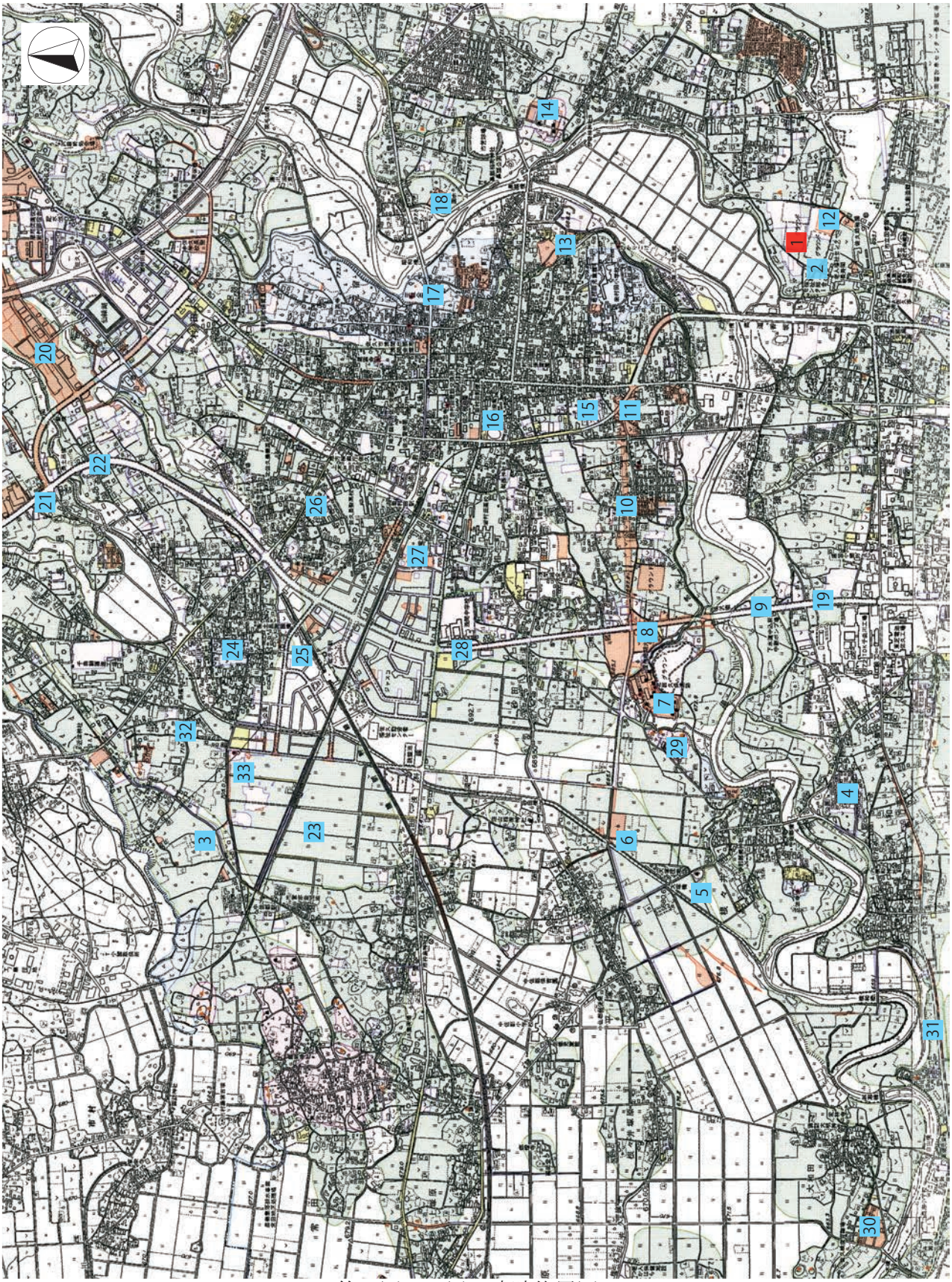
次に弥生時代は、前期と中・後期で様相が異なる。まず前期では発見された遺跡が非常に少ない。仲田遺跡の土坑より口縁二重突帯文の壺、東大門先遺跡Ⅱから同じく土坑より氷Ⅱ式に比定される細密条痕の甕が出土している。また、下信濃石遺跡Ⅱからは、弥生前期とすべき良好な土器・石器資料が出土している。次に中期では遺跡数も増え集落址が確認される。湯川下流より、川原端遺跡・森平遺跡・根々井芝宮遺跡・北西の久保遺跡・西一本柳遺跡、内陸部に円正坊遺跡がある。これらの遺跡はいずれも中期後半に比定されるが、中期後半古相は根々井芝宮遺跡のみである。このように中期に至り集落が形成されるようになっても立地は湯川沿岸を指向する。佐久平北部において弥生前期・中期を通して湯川が人々の諸々の活動において重要な位置を担っていたことが解る。後期になると集落は湯川沿岸より内陸部に進出するようになる。北から近津遺跡・宮の前遺跡・周防畑遺跡・上直路遺跡・円正坊遺跡・西一本柳遺跡・西一里塚遺跡などがあげられる。これらの遺跡は田切地形が消滅し、濁川により形成された低地を取り囲むように立地し、佐久平北部における稲作生産の本格的な導入を示唆している。また、当該時期の遺跡からは西近津遺跡より国内で最大級となる 18×9.5mの竪穴住居址が発見されたり、上直路遺跡からは屋内埋葬という特異な形態の土坑墓内より、埋葬者腕に装着された状態で銅釧 15 本が発見されている。

次の古墳時代前期は弥生後期の集落展開に比べ、規模が非常に縮小し立地も限定的となる。湯川沿いの小さな平地や田切台地でも縁辺など、弥生後期に開発した水田地帯を放棄するような状態である。つづく中期前半では、当該期に比定される遺跡が佐久地域において北西の久保遺跡のみであり、前期にもまして遺跡数が激減する時期である。中期前半は他地域においても遺跡数が減少するが、佐久地域の少なさは異常である。これとは対照的に中期後半から後期の所謂、５世紀後半から６世紀にかけての遺跡数の増加は目を見張るものがある。特に北部においては、弥生後期に集落が展開した地域とともに、新たに田切台地の内陸部まで集落が広がっていく。特に上聖端遺跡・芝宮遺跡・聖原遺跡といった遺跡では累積で 100 軒単位の集落が形成されている。この現象は佐久平において、5 世紀後半以降の集落選地の理由が大きく変わった、或いは加わったことを意味する。一つの可能性としては、水田経営に適さない高燥台地の内陸にあえて集落を展開するという事は集落維持のための生産基盤を牧経営等に置いた結果とも考えられる。

続く奈良時代は古墳後期と同じような場所に集落が展開し、生活・生産活動の継続性が見て取れる。平安時代になると、集落内の住居址数は増すが住居は小型化が顕著であり、平安時代後半には散村化の傾向がある。また、近年に周防畑遺跡群付近の調査事例で 「大井」の墨書や刻書が記載された土器が多く出土し、古代・大井郷の核地域であろうことが推測されている。また、仲田遺跡からは花弁双蝶八花鏡や「□□寺」の墨書土器が出土し寺院の存在を示唆している。

その後、鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井荘に土着し、大井氏を名乗るようになる。この地域は大井氏により発展し、『四隣譚藪』によれば「その賑わい国府にまされり」と例えられる隆盛を誇った。これらの関連遺跡としては現岩村田市街地付近に集中し、苑池の跡が発見された柳堂遺跡や龍雲寺との関連が推定される下信濃石遺跡、漆工房跡と考えられる北一本柳遺跡、また、大井氏の居城と考えられている大井城址などがある。

近世になってからは、地域内を「中山道」が通過し、それに伴う宿場整備で岩村田宿は繁栄する。特に岩村田は佐久甲州街道が通り、北国街道も近く中世の隆盛を彷彿とさせる状態であった。町屋調査としては中山道沿いの中宿遺跡等があげられる。以上、各時代の概観である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

第３図　　周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡一覧

No.	遺跡群名	遺 跡 名	所 在 地	検 出 遺 構	報告書
1	野馬窪遺跡群	野馬窪遺跡Ⅶ	猿久保		本報告書
2	野馬窪遺跡群	野馬窪遺跡Ⅵ	猿久保	竪穴住 27（古墳～平安）、竪穴状遺構 3、掘立 2、土坑 13、溝状遺構 8	第 230 集
3	近津遺跡群		長土呂字西近津森下	竪穴住 605（縄文～平安）、掘立 80、土坑 3、周溝墓 13	県調査
4	宮の上遺跡群	根々井芝宮遺跡	根々井字芝宮	竪穴住（弥生 43・古墳 3・平安 14）、掘立 3、土坑 27、溝 5	第 49 集
5	根々井大塚古墳		根々井字大塚	方形墳丘墓 1	年報 9
6	西一里塚遺跡群	西一里塚遺跡	岩村田字西一里塚	竪穴住（弥生後期 11）、周溝墓 1、環濠、土坑 7、溝 6	
7	岩村田遺跡群	北西の久保遺跡	岩村田字北西ノ久保	竪穴住（弥生中期 91・弥生後期 38・古墳中期 20）	
8	岩村田遺跡群	西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ	岩村田字西一本柳	竪穴住 201（弥生～平安）、掘立 45、土坑 12、溝 11	第 73 集
		西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ	岩村田字上樋田	竪穴住（弥生中期 3・弥生後期 1・古墳後期 2・奈良 1）、溝	第 91 集
		西一本柳遺跡Ⅶ	岩村田字西一本柳	竪穴住（弥生中期 7・後期 2・古墳後期 6・奈・平 1）、掘立 5、土坑 8、溝 6	年報 8
		西一本柳遺跡Ⅷ	岩村田字下樋田	竪穴住（弥生中期 9・弥生後期 7・古墳中期 6・古墳後期 42・奈良 16・平安 9・不明 2）、掘立 30、土坑 51、溝 13	第 109 集
		西一本柳遺跡Ⅸ	岩村田字西一本柳	竪穴住（古墳後期 16・奈良 1・平安 2・竪穴状 2）、掘立 9、土坑 12	第 113 集
		西一本柳遺跡Ⅹ	岩村田字西一本柳	竪穴住（弥生中期 34・弥生後期 12・古墳中期 12・古墳後期 15・奈良 21・平安 9・不明 2）、掘立 14、土坑 19、溝 14	年報 14
		西一本柳遺跡ⅩⅠ	岩村田字下樋田	竪穴住（弥生中期 1・弥生後期 1）、溝	年報 13
		西一本柳遺跡ⅩⅡ	岩村田字下樋田	竪穴住（古墳後期 5・奈良 1・竪穴状遺構 6）、掘立 2	第 125 集
		西一本柳遺跡ⅩⅢ	岩村田字下樋田	竪穴住（弥生中期 13・弥生後期 8・古墳中期 2・古墳後期 2・奈良 2・平安 1・不明 8）、掘立 5	第 139 集
		西一本柳遺跡ⅩⅣ	岩村田字上樋田	竪穴住（弥生中期 17・後期 17・古墳中期 3・後期 7・奈・平 11）、掘立 10、土坑 16、溝 13	第 175 集
		西一本柳遺跡ⅩⅤ	岩村田字常木上	竪穴住（弥生中期 3・後期 3・古墳後期 2・奈・平 5）、掘立 3、土坑 5	第 154 集
		西一本柳遺跡ⅩⅥ	岩村田字西一本柳	竪穴住（弥生中期 12・後期 1・古墳後期 4・奈良 1）、掘立 6、溝 3	第 160 集
		西一本柳遺跡ⅩⅦ	岩村田字西一本柳	竪穴住（弥生中期 1・後期 2・・奈良 2）、溝	第 169 集
9	寺畑遺跡群	仲田遺跡	猿久保字仲田	竪穴住（古墳中期 4・後期 6・奈良 10・平安 6）、掘立 11、土坑 6、H15 より花弁双蝶八花鏡	第 66 集
10	岩村田遺跡群	北一本柳遺跡Ⅱ	岩村田字北一本柳	竪穴住 4、土壙墓 1、溝 2	年報 14
		北一本柳遺跡Ⅲ	岩村田字北一本柳	竪穴住（弥生後期 48・古墳後期 11・中世 57）、掘立 13、土坑 310、溝 32	第 175 集
		北一本柳遺跡Ⅳ	岩村田字北一本柳	竪穴住 3、溝 2	第 158 集
11	岩村田遺跡群	東大門先遺跡Ⅱ	岩村田字東大門先	竪穴住（古墳後期 2・奈良・平安 15）、掘立 21、土坑 9、溝 10	第 175 集
12	野馬窪遺跡群	野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲ	猿久保字野馬窪	竪穴住 1、竪穴状遺構 17、掘立 13、土坑 234	第 170 集
13		下信濃石遺跡	岩村田字仁王前	寺院関連 1、竪穴状遺構 10、土坑 47、古瀬戸灰釉水滴	第 134 集
14		蛇塚古墳	安原字蛇塚	後期古墳 3 基、竪穴住 3、掘立 1	第 78 集
15	岩村田遺跡群	観音堂遺跡	岩村田字観音堂	竪穴住（平安 1・中世 27）、土坑 170、土壙墓 4、掘立 1	第 70 集
16	岩村田遺跡群	柳堂遺跡	岩村田字柳堂	竪穴住（弥生後期 2・平安 1・中世 33）、掘立 2、土坑 203、周溝墓 3、池	第 85 集
17		大井城址	岩村田字古城	竪穴住（古墳後期 15・中世 54）、掘立 3、土坑 285	
18		下小平遺跡	岩村田字下小平	竪穴住（弥生後期 5・古墳後期 1）、方形周溝墓 2	
19	寺畑遺跡群	寺畑遺跡	猿久保字下原	竪穴住（弥生 1・平安 1）、縄文草創期（爪形文土器・石器）	第 40 集
20	長土呂遺跡群	聖原遺跡	長土呂字聖原	竪穴住（古墳後期 155・奈良平安 663）、掘立 869、土坑 370、溝 40	第103 集～
21	芝宮遺跡群	下芝宮遺跡Ⅰ～Ⅳ	長土呂字下芝宮	竪穴住（古墳中期 5・後期 2・平安 2）、掘立 6	第 9 集
22	長土呂遺跡群	下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ	長土呂字下聖端	竪穴住（弥生後期 4・古墳中期 13・後期 25・奈良 1・平安 15）、掘立 18	第 9 集
23	周防畑遺跡群		長土呂	竪穴住 92（弥生～平安）、掘立 9、円形周溝墓 15、土坑 422	県調査
24	長土呂遺跡群	長土呂館址	長土呂	中世館址	
25	長土呂遺跡群	下伯母塚遺跡	長土呂字下伯母塚	竪穴住（弥生後期末 9）、溝址、銅鏃	第 110 集
26	枇杷坂遺跡群	上直路遺跡	岩村田字上直路	竪穴住（弥生後期 2）、銅釧 11	年報 5
27	円正坊遺跡群	円正坊遺跡Ⅱ	岩村田字円正坊	竪穴住（弥生中期 2・弥生後期 1・古墳後期 2・平安 2）、掘立 1、古墳 1	第 53 集
		円正坊遺跡Ⅳ	岩村田字円正坊	竪穴住（古墳中期 7・後期 23・平安 4）、方形・円形周溝墓 10	第 102 集
		円正坊遺跡Ⅵ	岩村田字円正坊	竪穴住 37、掘立 4、壺棺墓 1、土坑 26	年報 15
		円正坊遺跡Ⅷ	岩村田字円正坊	竪穴住（弥生～平安 41）、掘立 2、土坑 11、溝 3、円形周溝墓 1	第 185 集
28	岩村田遺跡群	松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ	岩村田字松の木	竪穴住（弥生～古墳 10）、掘立 1、土坑 1、溝 6	第 91 集
29	鳴沢遺跡群	五里田遺跡	根々井字五里田	竪穴住（弥生中期 43）、周溝墓 5、古墳址 2、土坑 37	第 74 集
30	大和田遺跡群	川原端遺跡	鳴瀬字川原端	竪穴住（弥生中～後期 13・古墳 49）、掘立 20、土坑 22、溝 24	第 89 集
31	寄塚遺跡群	寄塚遺跡	横和字寄塚	竪穴住 13（弥生中期後半・古墳前期）、掘立 6、土坑 17	第 157 集
32	周防畑遺跡群	宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ他	長土呂字宮の前	竪穴住 350（弥生後期～平安）、掘立 112、土坑 176、溝 68、周溝墓	第 240 集
33	周防畑遺跡群	大豆田遺跡Ⅳ	長土呂	竪穴住 26（弥生後期～平安）、竪穴 3、掘立 33、土坑 139、溝 76	第 229 集

第Ⅲ章　調査の方法

第１節　調査の方法

遺跡名・調査区

遺跡名は、佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、野馬窪遺跡Ⅶとした。ローマ数字は調査次数である。調査区を網羅するように、国家座標に沿って 40×40ｍの区画を設定し、北よりローマ数字を付した。この 40ｍの区画は北東隅を起点に 4ｍの各グリットを設定した。グリットは野馬窪遺跡Ⅳと共通の名称を使用した。

遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号はアルファベットで以下の決まりに従い付けられている。

○３文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。　Ｓ= 猿久保
○３文字の２番目は遺跡群名のローマ字表記の頭文字である。　Ｎ= 野馬
○３文字の３番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。　Ｋ= 窪
○末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す。　Ⅶ= 7 地点目

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

Ｈ＝住居址（竪穴住居址）
Ｆ＝掘立柱建物址　　Ｍ= 溝状遺構
Ｄ＝土坑（陥穴、貯蔵穴等）　　Ｔ= 特殊遺構
Ｐ＝ピット（柱状のものを建てたと思われる、多くは小径の掘り込み）

遺構調査

住居址は均等に４分割し、対面する２区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴･カマド等を適宜分割し、土層の観察･記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は４分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続する No を付け３次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って２分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。ピットも土坑と同様であるが、遺物は遺構 No で一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、 縮尺は 1/20 を基本とした。

写真

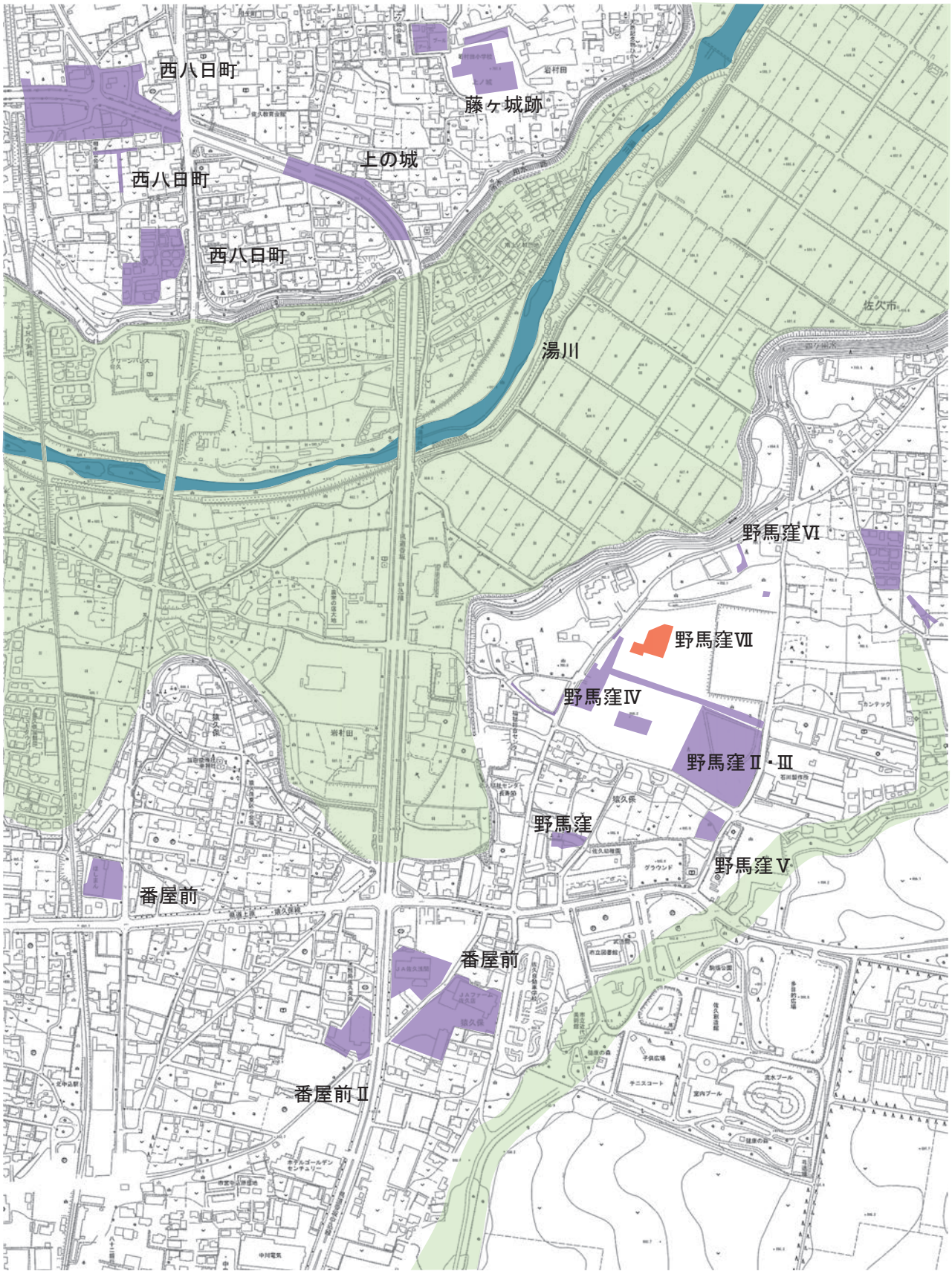
現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによる RAW 画質モードと、35 ㎜一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPS データ形式で報告書に使用した。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は手で竹ブラシを用い行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物の接合はセメダインＣを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。図面は遺構を 1/40 で修正し、仮図版を作成した。遺物は 1/1 で実測し、1/2 で仮図版を作成した。

報告書

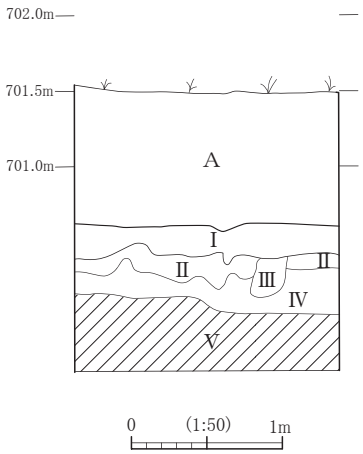
文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。


西八日町
藤ヶ城跡
上の城
西八日町
西八日町
湯川
野馬窪Ⅵ
野馬窪Ⅶ
野馬窪Ⅳ
野馬窪Ⅱ・Ⅲ
野馬窪
野馬窪Ⅴ
番屋前
番屋前
番屋前Ⅱ

第４図　調査遺跡位置図

第2節　基本層序

本調査区の土層は基本的に６層に分層される。Ａ層は盛土で調査区全体を 0.7 ～ 1.5ｍの厚みで覆っていた。遺構確認面はⅡ層のにぶい黄褐色土であり、Ⅴ層がいわゆる P1 層であった。



第６図　基本層序図

Ａ.灰白色土(10YR7/1) 盛土。

Ⅰ.褐灰色土(10YR4/1) しまり・粘性やや弱い。
φ1～2cmの小石を含む。旧表土。畑の土。

Ⅱ.にぶい黄褐色土(10YR4/3)
しまり・粘性あり。やや褐色土がかった土。
軽石を含む。

Ⅲ.黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性あり。
遺構覆土。

Ⅳ.黄褐色土(10YR5/6) しまり・粘性あり。
φ1～2cmの軽石を含む。
ローム暫移層。

Ⅴ.明黄褐色土(10YR6/8) しまり・粘性あり。
P1層(軽石流二次堆積物)

第3節　遺構と遺物の概要

検出された遺構・遺物は以下のとおりである。

遺　構	竪穴住居址	４軒（平安時代）
	土　　坑	27 基
	溝状遺構	３本
遺　物	縄文土器（前期）・灰釉陶器・土師器・須恵器・石器・鉄製品・陶磁器類	

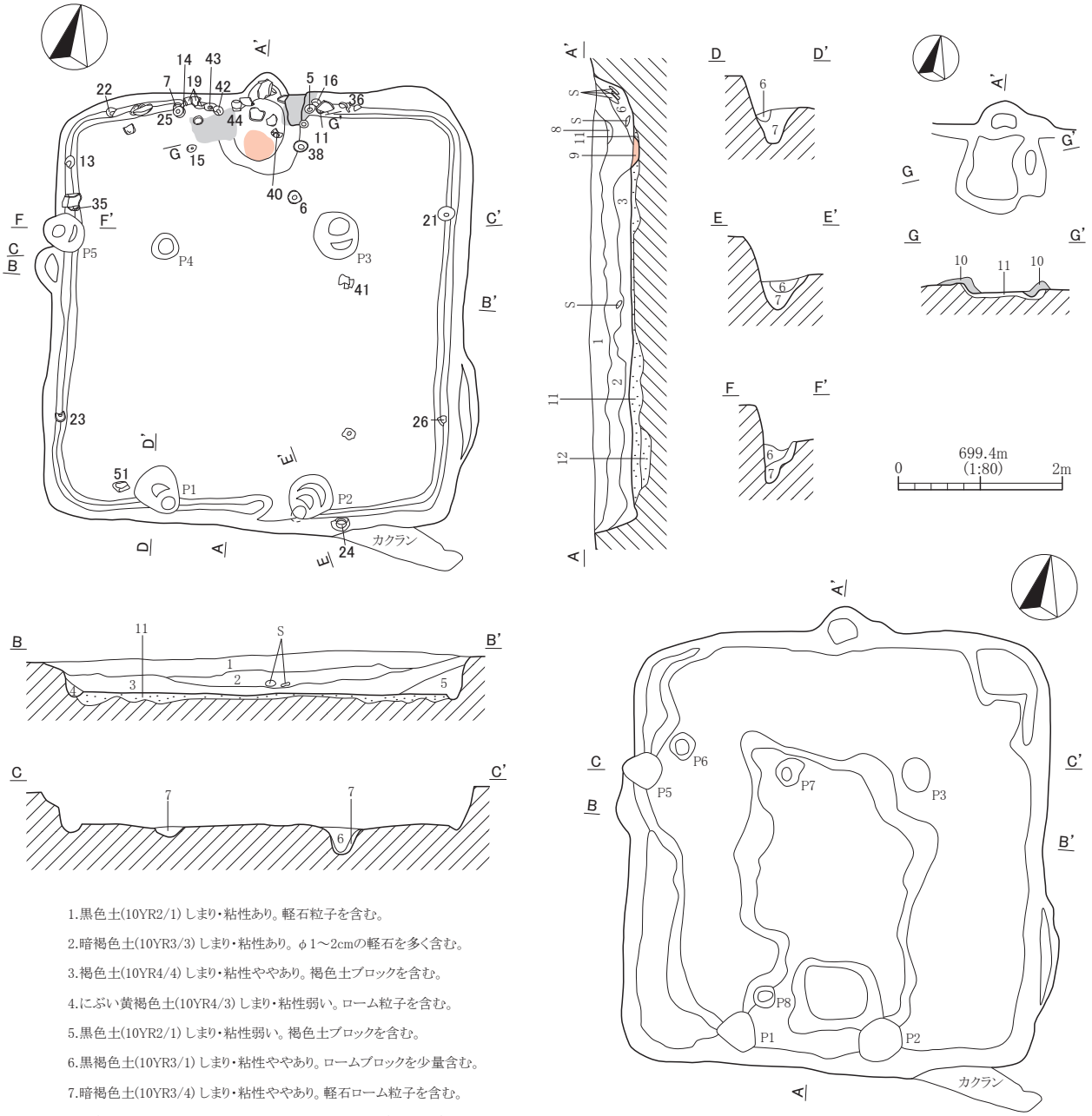
調査地点より北に浅間山を望む

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

（1）H1号住居址

本址は調査区西側のM-エ-8・9、M-オ-8・9Grで検出された。形態はほぼ正方形である。規模は南北長4.68m・東西長4.40mで、床面積は21.06㎡を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北東コーナー付近で0.48mを測る。床は硬質であり、特にカマド前面と住居中央が顕著に硬質化していた。覆土は自然堆積を示し、ピットは８か所確認され、Ｐ1～Ｐ3、Ｐ5が主柱穴と考えられる。

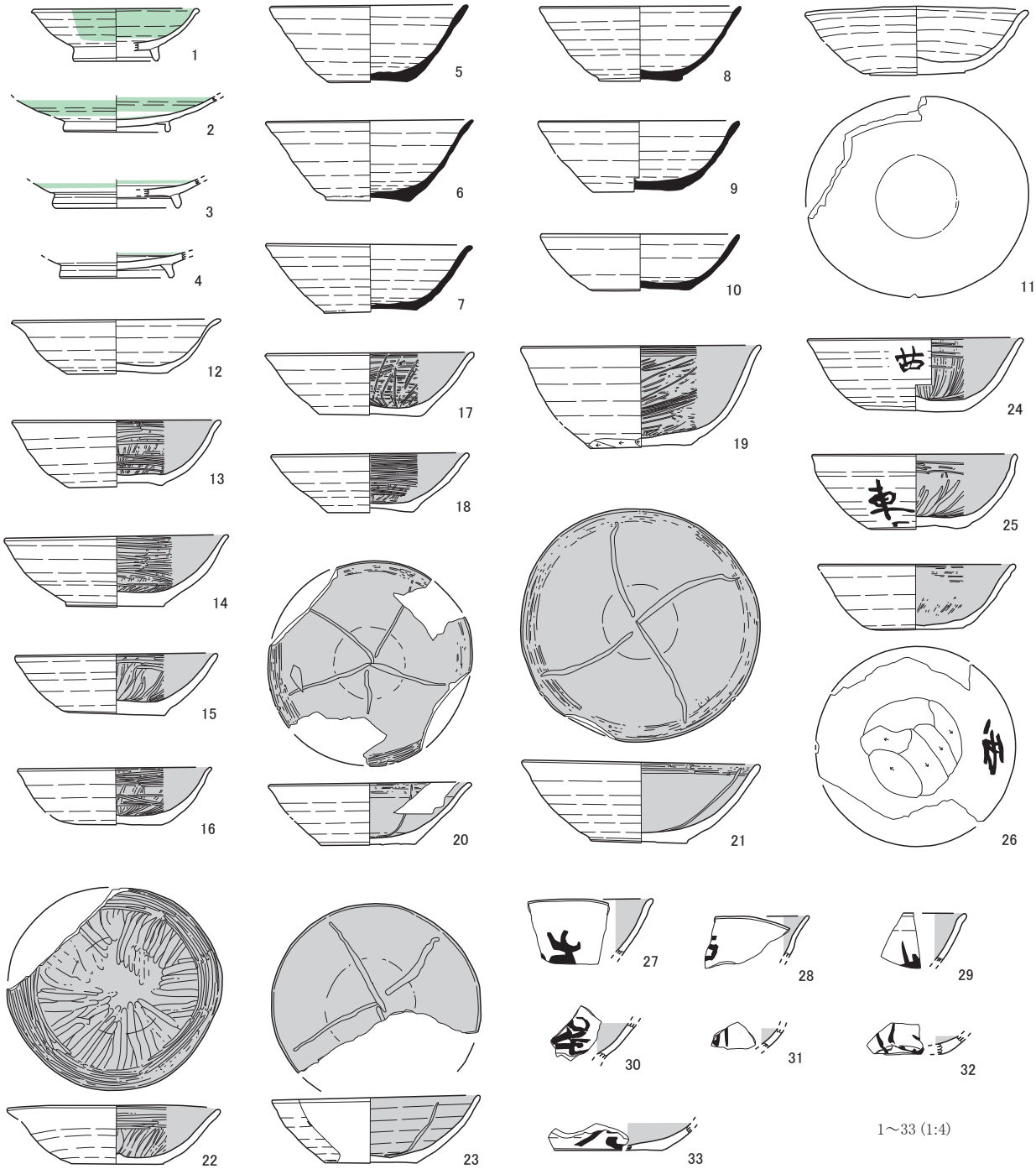


1.黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり。軽石粒子を含む。
2.暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。φ1～2cmの軽石を多く含む。
3.褐色土(10YR4/4) しまり・粘性ややあり。褐色土ブロックを含む。
4.にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり・粘性弱い。ローム粒子を含む。
5.黒色土(10YR2/1) しまり・粘性弱い。褐色土ブロックを含む。
6.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。ロームブロックを少量含む。
7.暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性ややあり。軽石ローム粒子を含む。
8.褐色土(10YR4/6) しまり・粘性弱い。焼土粒子・粘土ブロックを含む。
9.赤褐色土(5YR4/6) しまり・粘性弱い。よく焼けている。
10.明黄褐色土(10YR7/6) しまり・粘性あり。黄色の粘土層。
11.にぶい黄橙色土(10YR6/4) しまり・粘性あり。軽石粒子を含む。
12.にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり・粘性あり。φ3～4cmの軽石を多く含む。

第７図　　Ｈ１号住居址実測図

各ピットの規模はP1が径0.58m・深さ0.67m、P2が径0.60m・深さ0.63m、P3が径0.60m・深さ0.65m、P4が径0.33m・深さ0.12m、P5が径0.51m・深さ0.51m、P6が径0.34m・深さ0.25m、P7が径0.36m・深さ0.22m、P8が径0.30m・深さ0.27mを測る。壁溝は住居全体に巡り、深さは0.02～0.08mを測る。住居址掘方は住居址中央部が一段高くなる形状で、段差は0.08～0.13mを測る。

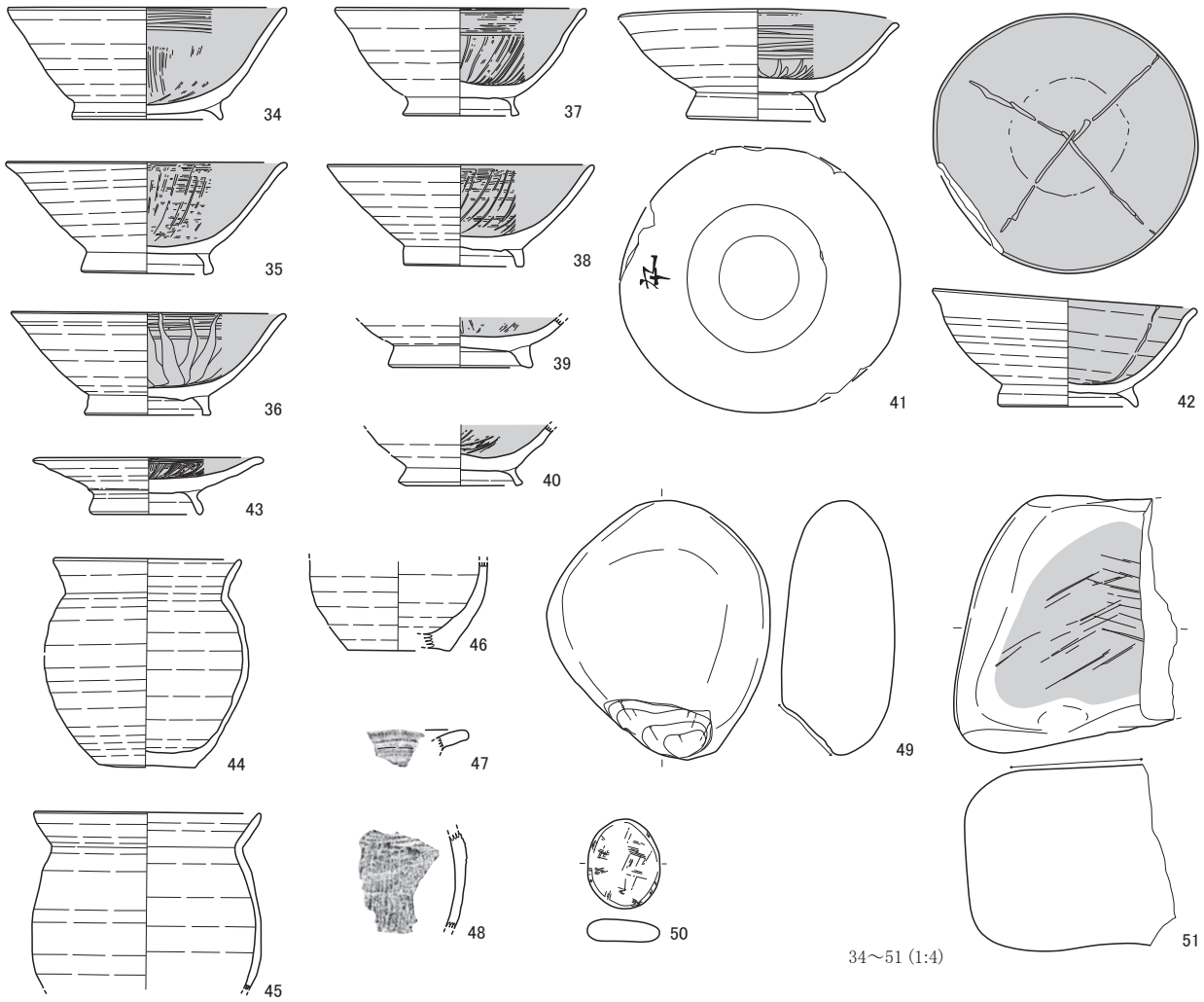
カマドは北壁中央部に構築されており、袖部は一部しか残存しておらず、カマド構築材と考えられ軽石が煙道部に破棄されていた。火床部は顕著な焼けが確認され、硬質化していた。また、カマド周辺部からは土師器坏を中心にまとまって出土し、重ねた状態の土器も確認された。



第８図　　Ｈ１号住居址出土遺物実測図（1）

本址からの出土遺物は覆土やカマド周辺部からまとまって出土した。１～４は灰釉陶器の椀と皿である。１と２は刷毛掛けによる施釉と考えられる。５～10は須恵器坏である。11と12は土師器坏としたが、いわゆる須恵器の生焼けのような状態で、成形状は須恵器と酷似する。また、11は聖原遺跡等で指摘された「杓状坏」と呼ばれる形状で、楕円形を呈する。13～33は土師器坏である。内面はすべて黒色処理が施され、暗文状のミガキが施された坏が20～23の４点が確認された。また、24～33は墨書や墨痕が確認できる。判読できる土器として、25は「車」、26は「西」がある。34～42は土師器椀である。いずれも内面黒色処理が施されている。また、41は体部外面に「卆」と墨書が確認できる。42は内面見込み部に暗文風のミガキがある。43は土師器皿である。内面に黒色処理が施されている。44～48は土師器甕である。44～46はロクロ成形の甕でいずれも小型のものである。47と48はいわゆる「伊勢甕」の口縁部と胴部の破片と考えられる。いずれも白色の胎土で、在地の土器とは明らかに異なる。49は叩き痕のある石で、50は磨き石と考えられる。51は欠損しているが、片面に顕著な磨り痕が確認でき、台石的な使用が考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、９世紀後半の所産時期が考えられる。



第９図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図（２）

(2) H2号住居址

本址は調査区西側のM-エ-8・9、M-オ-8・9Grで検出された。形態は長方形である。規模は南北長3.00m・東西長3.50mで、床面積は9.54㎡を測る。住居址の主軸方向はN－５°－Eを測る。

第２表　Ｈ１号住居址出土遺物観察表 (1)

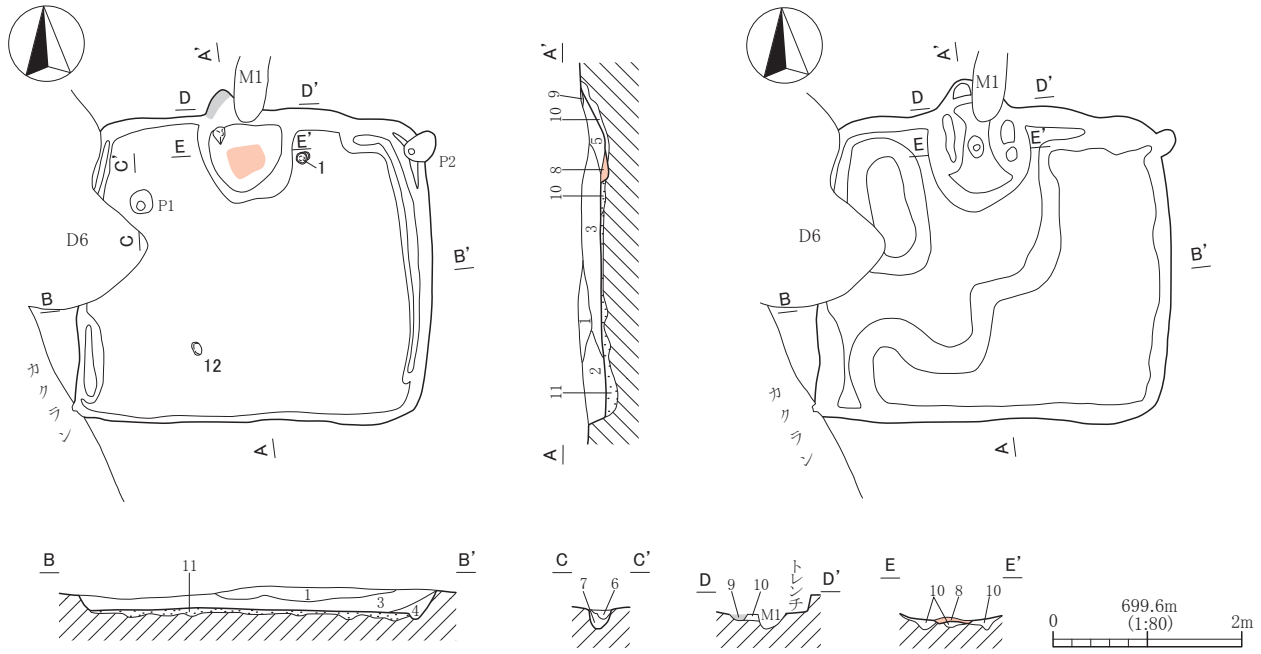
H1	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値〈 〉丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
1	灰釉陶器	碗	(10.6)	(5.5)	3.3	ロクロナデ→施釉（ハケ）	ロクロナデ→高台貼付→施釉（ハケ）	回転実測	Ⅲ区
2	灰釉陶器	碗	－	6.8	〈2.3〉	ロクロナデ→施釉（ハケ） 内面みこみ部に重ね焼きの痕跡あり みこみ部スベスベ	ロクロナデ→高台貼付→施釉（ハケ）	完全実測	Ⅳ区
3	灰釉陶器	碗	－	(8.2)	〈1.8〉	ロクロナデ→施釉 内面みこみ部に重ね焼きの痕跡あり みこみ部スベスベ	ロクロナデ→高台貼付→施釉	回転実測	Ⅲ区
4	灰釉陶器	碗	－	(7.2)	〈1.6〉	ロクロナデ→施釉 内面みこみ部に重ね焼きの痕跡あり みこみ部スベスベ	ロクロナデ→高台貼付→施釉	回転実測	Ⅱ区
5	須恵器	坏	12.5	5.0	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	
6	須恵器	坏	13.2	5.6	5.2	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	
7	須恵器	坏	13.1	5.9	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	
8	須恵器	坏	12.8	5.3	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	Ⅲ区
9	須恵器	坏	(12.8)	5.8	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	Ⅳ区
10	須恵器	坏	(12.6)	(6.4)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	回転実測	Ⅱ・Ⅲ区
11	土師器	杓状坏	(14.2)	6.0	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（左）	完全実測	
12	土師器	坏	(13.2)	(6.4)	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	回転実測	Ⅳ区
13	土師器	坏	13.2	5.7	4.3	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	
14	土師器	坏	14.2	6.2	4.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り（左）	完全実測	
15	土師器	坏	12.8	6.4	3.9	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	
16	土師器	坏	(12.3)	7.0	3.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	
17	土師器	坏	13.1	6.7	4.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸きり（右）	完全実測 口縁部、内外に煤付着	Ⅳ区
18	土師器	坏	(12.4)	(5.4)	3.7	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	回転実測	カマド
19	土師器	坏	15.2	6.4	4.4	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→底部と外周ヘラケズリ	完全実測	
20	土師器	坏	12.9	5.9	4.0	ミガキ・暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区
21	土師器	坏	15.0	6.1	5.3	ミガキ・暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り（左）	完全実測　煤付着	
22	土師器	杓状坏	(13.5)	5.8	3.7	ミガキ・暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り後ヘラケズリ	完全実測	
23	土師器	坏	13.1	5.8	4.3	ロクロナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸きり後 外周一部ヘラケズリ	完全実測 墨書あり	
24	土師器	坏	13.7	6.0	4.7	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測　墨書あり	
25	土師器	坏	13.0	6.5	4.8	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実測　墨書あり	
26	土師器	坏	(12.5)	5.9	4.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸きり（右）→ヘラケズリ	完全実測 墨書あり（西）	
27	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅳ区
28	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅱ区
29	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅰ区
30	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅰ・Ⅲ区
31	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅳ区
32	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅰ区
33	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅱ区
34	土師器	椀	(15.2)	(8.2)	6.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付	回転実測	Ⅲ区ホリ　Ⅳ区
35	土師器	椀	15.3	7.2	6.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付	完全実測	Ⅱ区
36	土師器	椀	15.0	6.9	5.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付	完全実測	Ⅰ区
37	土師器	椀	(13.7)	6.3	5.9	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付	完全実測	カマド
38	土師器	椀	14.6	6.6	5.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り→高台貼付	完全実測	
39	土師器	椀	－	7.9	〈2.7〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部切り離し→高台貼付	完全実測	カマド
40	土師器	椀	－	6.8	〈3.3〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付	完全実測	
41	土師器	碗	(15.3)	7.6	6.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸きり→高台貼付	完全実測 墨書あり 歪みあり	Ⅰ区
42	土師器	碗	14.5	7.6	6.4	ロクロナデ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部切り離し→高台貼付	完全実測	
43	土師器	皿	12.6	6.2	3.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り→高台貼付	完全実測	

第３表　Ｈ１号住居址出土遺物観察表 (2)

H1	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値〈 〉丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
44	土師器	小型ロクロ甕	(10.3)	5.3	11.4	ロクロナデ	ロクロナデ→底部糸きり→一部へラケズリ	完全実測	
45	土師器	小型ロクロ甕	(12.4)	－	〈9.6〉	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ区
46	土師器	小型ロクロ甕	－	5.6	〈3.8〉	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	Ⅱ・Ⅳ区　ケン
47	土師器	甕（伊勢甕）	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	破片実測　拓本 48と同一固体か？	Ⅰ区
48	土師器	甕（伊勢甕）	－	－	－	ミガキ	ハケナデ	断面実測　拓本 47と同一固体か？	Ⅰ区

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
49	敲石	石	14.2	12.2	6.1	1320.00	被熱なし　下端部に敲打痕	Ⅰ区
50	磨石	石	4.9	3.9	1.2	27.86	被熱なし　全体にすり	Ⅱ区
51	台石	石	〈14.0〉	〈12.2〉	〈10.7〉	〈2845.00〉	被熱なし　片側欠損　使用面１　擦痕あり	

壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北東コーナー付近で0.36mを測る。床は硬質であり、特にカマド前面が顕著に硬質化していた。覆土は自然堆積を示す。ピットは２か所で確認された。各ピットの規模はＰ1が径0.26m・深さ0.24m、Ｐ2が径0.36m・深さ0.07mを測る。住居址の掘方は南東コーナーに向かって掘り下げてあり、カマド前面より0.10m程深くなっていた。カマドは北壁中央部で検出された。火床部は顕著に焼けていた。構造は、煙道部に一部粘土が検出されたが、袖部には構築材も無く、構造は不明である。

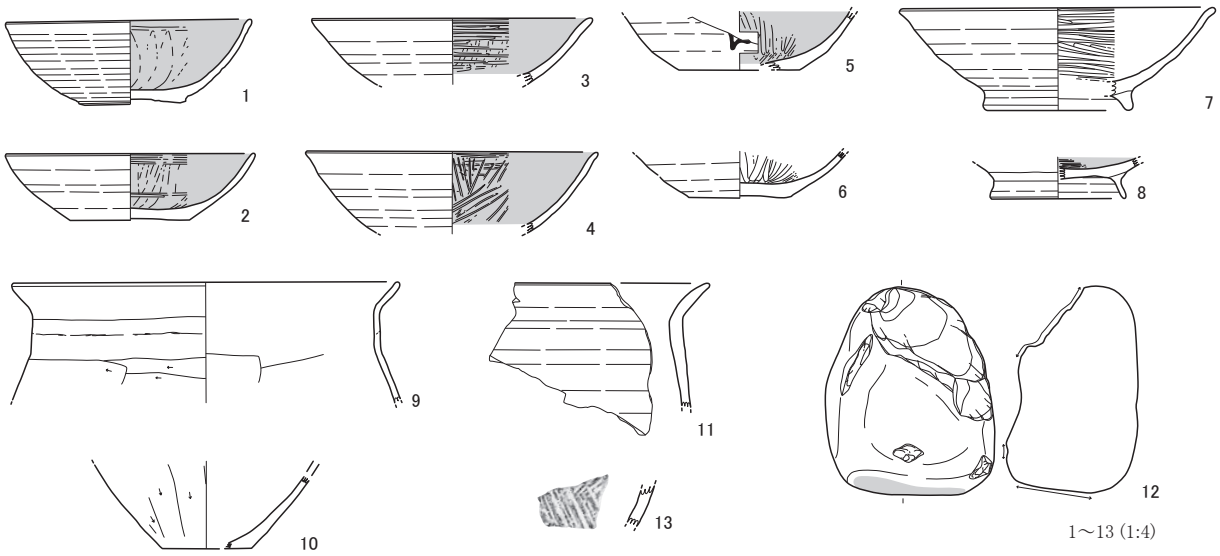


1.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性弱い。φ2～3cmの軽石を多く含む。
2.暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。白色粒子を含む。
3.黒色土(10YR2/1) しまりあり。粘性弱い。
4.暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性あり。こぶし大の軽石を含む。
5.黄褐色土(10YR5/6) しまり・粘性あり。焼土ブロックを少量含む。
6.黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性弱い。
7.褐色土(10YR4/4) しまり・粘性あり。軽石を多く含む。
8.明赤褐色土(2.5YR5/8) しまり・粘性弱い。焼土層。
9.褐色土(10YR4/4) 粘土を含む。
10.褐色土(10YR4/4) しまり・粘性弱い。φ2～3cmの軽石を多く含む。
11.暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。軽石を多く含む。(貼床)

第10図　Ｈ２号住居址実側図

本址からの出土遺物は、覆土中やカマド前から出土した。１～6は土師器坏である。６以外は内面黒色処理が施されている。５は体部外面に判読不明な墨書が確認できる。7と８は土師器椀である。8は内面黒色処理が施されている。９～10は土師器甕で、いわゆる「武蔵甕」と呼ばれるものである。11はロクロ成形の甕である。12は磨り石と考えられ、一部に磨りが確認できる。13は弥生後期の箱清水式土器の甕片と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より、９世紀後半の所産時期が考えられる。



第11図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図

第４表　Ｈ２号住居址出土遺物観察表

H2	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値〈 〉丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	13.0	5.8	4.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸きり（右）	完全実測 口唇部に煤付着	
2	土師器	坏	(13.2)	(6.4)	3.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り（左）	回転実測	Ⅱ区
3	土師器	坏	(14.9)	－	〈3.5〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	Ⅰ区
4	土師器	坏	(15.6)	－	〈4.3〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	Ⅱ区　カマド
5	土師器	坏	－	(6.4)	〈3.1〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切り	回転実測　墨書あり	ケン
6	土師器	坏	－	5.5	〈2.5〉	ミガキ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	ケン
7	土師器	碗	(16.8)	(8.0)	5.4	ミガキ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）→高台貼付	回転実測	Ⅰ・Ⅲ区
8	土師器	碗	－	(7.2)	〈2.1〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→高台貼付	回転実測	ケン
9	土師器	武蔵甕	(20.6)	－	〈6.4〉	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ・Ⅳ区
10	土師器	武蔵甕	－	(4.8)	〈4.6〉	磨耗	胴部ヘラケズリ　底部ヘラケズリ	回転実測	Ⅳ区
11	土師器	小型 ロクロ甕	－	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	破片実測	Ⅳ区
13	弥生	甕	－	－	－	ナデ	櫛描斜走文	断面実測　拓本	Ⅰ区

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
12	磨・敲石	石	11.0	8.9	6.8	899.36	被熱なし　上端部に敲き　下端部にすり面	

(3) H3号住居址

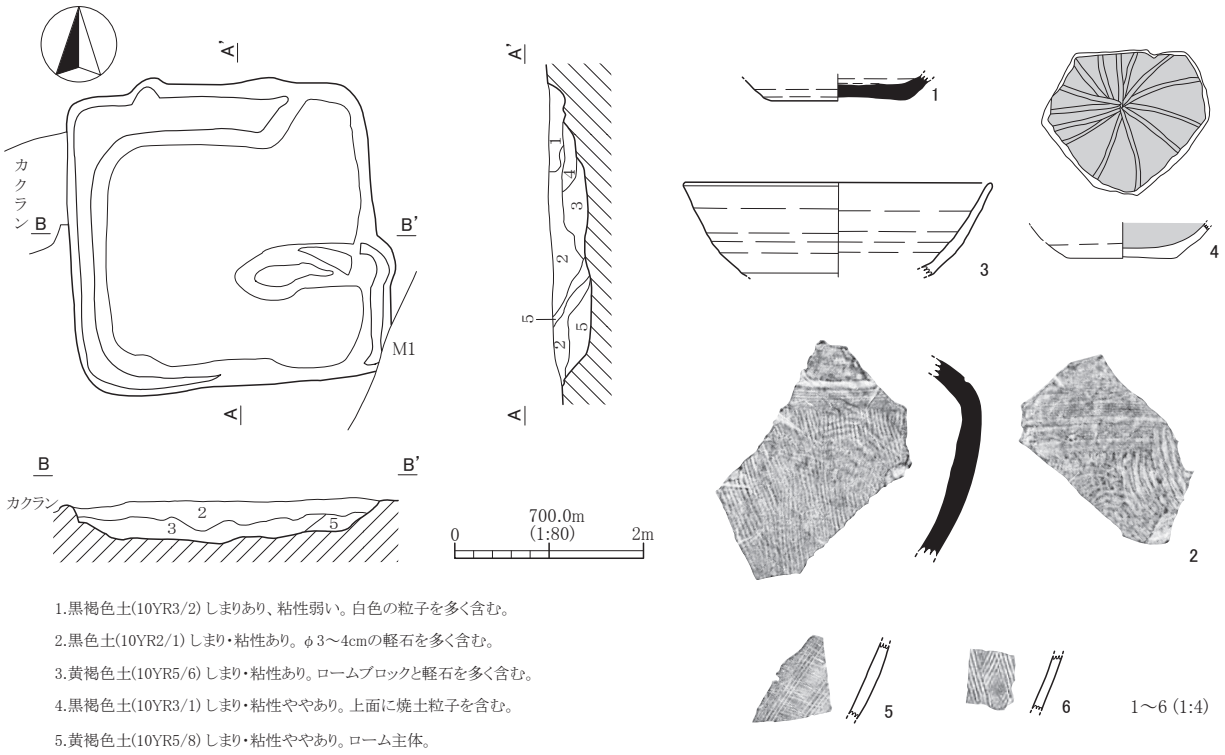
本址は調査区西側のM-カ-５・６、M-キ-５・６Grで検出された。形態はほぼ正方形である。長軸方位はＮ－88°－Ｅを測る。規模は長軸の東西長2.94m、短軸の南北長2.76mを測る。床面積は8.58㎡を測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、北西コーナー付近で0.35mを測る。本址は貼り床状の部分は確認できなかった。住居内覆土を掘り下げの途中、２層と３層の間で土質の変化があり、いったん精査を行った。しかし、しまった床は確認されず、２層も平坦ではなかったので、地山ま

で掘り下げを行った。

結果、遺構底面は凹凸があり、北壁と南壁の一部と西壁にテラス状の段を確認した。また、東壁中央で、深さ0.06～0.12mの土坑状の掘り込みを検出した。カマド・炉は確認されなかった。

本址からの出土遺物は少なく６点を図示した。1は須恵器坏の底部破片である。3と４は土師器坏で、４は見込み部に暗文風のミガキが施され、内面黒色処理が施されている。2は須恵器甕の胴部破片である。肩部に一本の沈線が巡る。５と６は弥生後期の箱清水式土器の甕片と考えられる。

本址はこれらの出土遺物から9～10世紀代の所産時期が考えられる。遺構の性格は、火床を持たないことから作業小屋的な使用が考えられる。



1.黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性弱い。白色の粒子を多く含む。
2.黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり。φ3～4cmの軽石を多く含む。
3.黄褐色土(10YR5/6) しまり・粘性あり。ロームブロックと軽石を多く含む。
4.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性ややあり。上面に焼土粒子を含む。
5.黄褐色土(10YR5/8) しまり・粘性ややあり。ローム主体。

第12図　Ｈ３号住居址及び出土遺物実測図

第５表　Ｈ３号住居址出土遺物観察表

H3	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値＜ ＞丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	坏	－	(7.0)	＜1.4＞	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り	回転実測	Ⅳ区
2	須恵器	甕	－	－	－	ロクロナデ　当具痕	ロクロナデ　平行タタキ　平行沈線	断面実測	Ⅰ区
3	土師器	坏	(16.4)	－	＜5.0＞	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅱ区
4	土師器	坏	－	5.9	＜1.9＞	暗文　黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	ケン
5	弥生	甕	－	－	－	ヘラミガキ	櫛描斜走文	断面実測　拓本	Ⅳ区
6	弥生	甕	－	－	－	ヘラミガキ	櫛描斜走文	断面実測　拓本	Ⅰ区

(4) H4号住居址

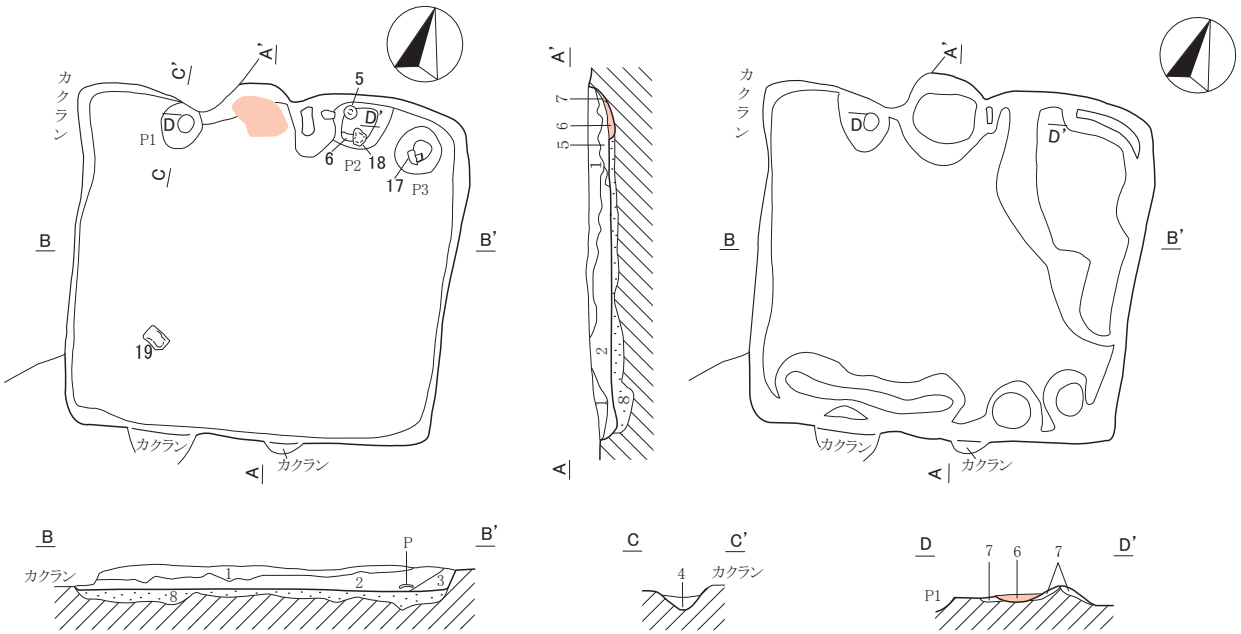
本址は調査区北側のＥ-カ-10、Ｅ-キ-10、Ｌ-カ-１、Ｌ-キ-1Grで検出された。形態はほぼ正方形である。規模は南北長3.42m、東西長3.76mで、北壁にカマドが構築されており、主軸方位はＮ－11°-Wを測る。床面積は13.14㎡を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北東コーナー付近で0.25mを測る。床は硬質であり、特にカマド前面と住居中央が顕著に硬質化していた。覆土は自然堆積を示し、ピットは３ヶ所確認され、Ｐ２とＰ３は貯蔵穴と考えられる。各ピットの規模はＰ1が径0.46m・深さ0.22m、Ｐ2が径0.74m・深さ0.10m、Ｐ3が径0.52m・深さ0.19mを測る。

住居址の掘方は、北東コーナーと南壁際が一段深く掘り込まれていた。北東コーナーの掘り込み深さは0.20mを測り、底面は凹凸が激しかった。

カマドは北壁中央で検出され、右側の袖部一部と火床部が残存していた。袖部は黒色土と粘土ブロックの混合土で構築されており、火床部の焼土はよく焼けており、厚みは0.08mを測る。

本址からの出土遺物は、覆土中やカマド周辺からまとまって出土した。１は須恵器坏である。２は須恵器甕の口縁部から頸部の破片である。３は同じく須恵器甕の胴部破片である。４～14は土師器坏である。４は体部外面に焼成後と考えられるヘラ記号が確認できる。５は体部外面に「庄」と読める墨書がある。９～14も墨書或いは墨痕と考えられ、10は「庄」と考えられる。８は土師器坏であるが、体部外面を赤外線観察したところ、図示したような円形の模様が確認できた。15は土師器椀であり、内面黒色処理が施されている。16と17は土師器甕である。18は敲き石と考えられ、両極の角に敲き痕が確認できる。19は床面上に置かれたような状態で出土した。両面に顕著な磨り痕と線状の擦痕が確認できる。20は石鏃破片である。21～26は縄文前期の深鉢破片と考えられる。27は判読できないが戦前の銅貨と考えられる。

本址はこれらの出土遺物より９世紀後半の所産時期が考えられる。



1.灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性あり。φ2～3cmの軽石を多く含む。カクランの土。

2.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。ロームブロックを多く含む。

3. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性ややあり。

4.黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。ローム粒子が多い。

5.黒色土(10YR2/1) しまり・粘性ややあり。焼土ブロックを多く含む。

6.明赤褐色土(2.5YR5/8) しまり・粘性弱い。火床部でよく焼けている。

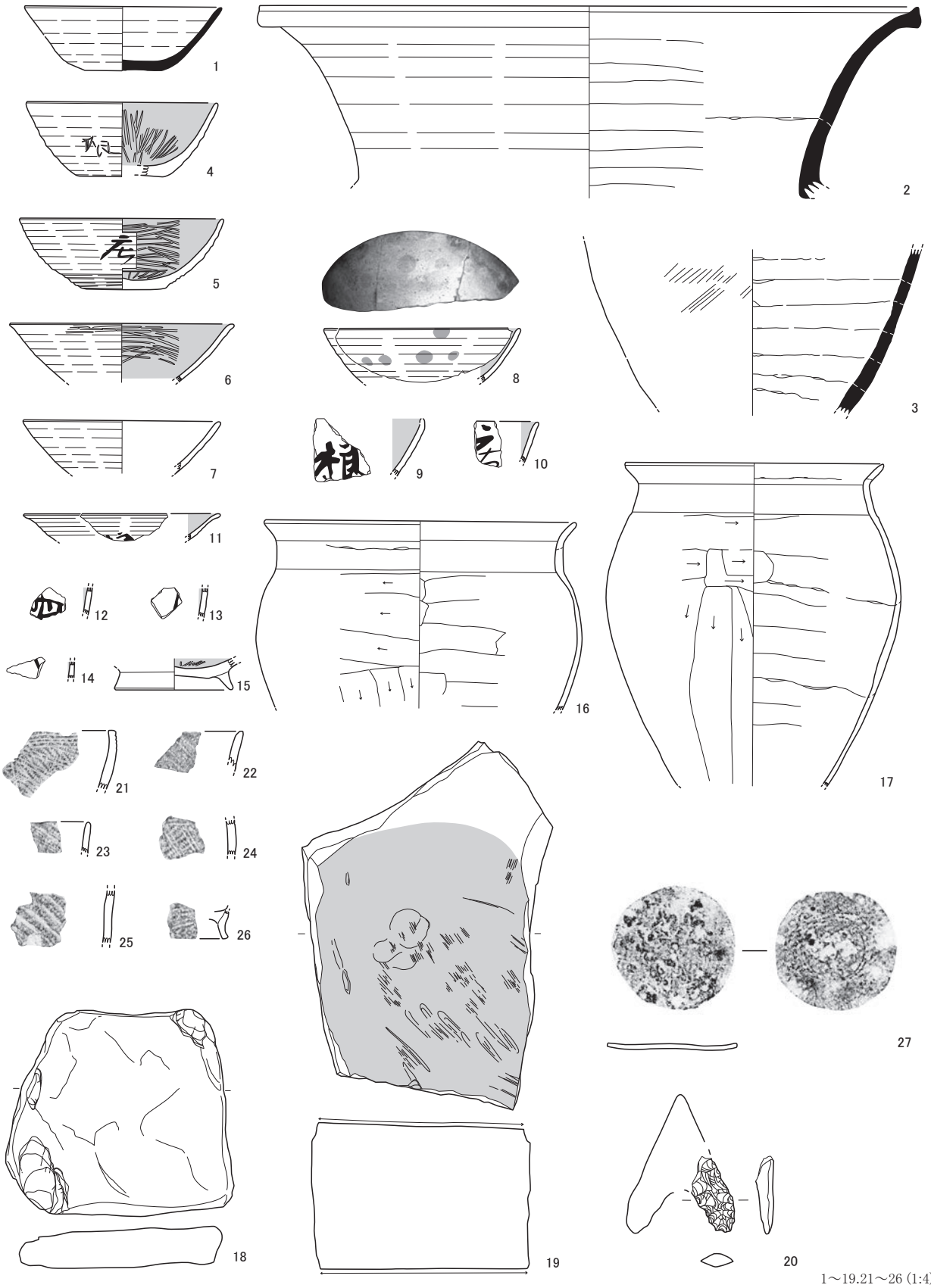
7.黄褐色土(10YR5/6) しまり・粘性ややあり。ローム土と黒色土の混合土。少量の粘土ブロックを含む。

8.褐色土(10YR4/4) しまり・粘性ややあり。φ2～3cmの軽石を多く含む。上面硬質化している。

第13図　Ｈ４号住居址実測図

第６表　Ｈ４号住居址出土遺物観察表（1）

H4	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値〈 〉丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
1	須恵器	坏	(13.8)	5.3	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）	完全実測	Ⅲ区
2	須恵器	甕	(46.0)	－	〈13.4〉	ヘラナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅳ区
3	須恵器	甕	－	－	〈11.6〉	当具痕→ヨコナデ	タタキ→ヨコナデ	完全実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区
4	土師器	坏	(13.4)	(5.6)	5.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切り　ヘラ記号	回転実測	Ⅱ区
5	土師器	坏	14.3	5.9	5.0	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ　底部外周工具痕	回転実測　墨書あり	



1～19.21～26 (1:4)
20.27 (1:1)

第14図　Ｈ４号住居址出土遺物実測図

第７表　Ｈ４号住居址出土遺物観察表 (2)

H4	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値＜ ＞丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
6	土師器	坏	(15.8)	－	＜4.1＞	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ　口縁部ヘラミガキ	回転実測	
7	土師器	坏	(13.8)	－	＜3.7＞	ナデ	ロクロナデ	回転実測	Ⅲ区
8	土師器	坏	(13.8)	－	＜3.8＞	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ　円形の印あり	回転実測	Ⅱ区
9	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅳ区
10	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅲ区
11	土師器	坏	13.8	－	＜1.9＞	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測　墨書あり	Ⅱ区ホリ
12	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅰ区
13	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅲ区
14	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書あり	Ⅳ区
15	土師器	碗	－	8.1	＜2.2＞	坏部ミガキ→黒色処理　脚部ナデ	ロクロナデ→底部回転糸切り（右）→高台貼付	回転実測	Ⅰ区
16	土師器	武蔵甕	(21.8)	－	＜13.1＞	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ区
17	土師器	武蔵甕	(18.0)	－	＜22.5＞	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区
21	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	竹管による平行沈線　縄文	断面実測　拓本	Ⅰ区
22	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	縄文	断面実測　拓本	Ⅱ区
23	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	縄文	断面実測　拓本	Ⅲ区
24	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	竹管による平行沈線　縄文	断面実測　拓本	Ⅲ区
25	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	沈線	断面実測　拓本	Ⅳ区
26	縄文	深鉢	－	－	－	ナデ	縄文	断面実測　拓本	Ⅱ区

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
18	敲石	石	14.5	16.0	3.0	1061.96	被熱なし　角に敲打痕	
19	台石	石	25.8	17.5	10.5	8100.00	被熱なし　使用面２　擦痕あり	
20	石鏃	黒曜石	＜1.35＞	＜0.75＞	＜0.30＞	＜0.21＞	被熱なし　片脚のみ残存	
27	銅貨		2.3		0.1	2.89	一銭　半銭？	Ⅰ区

第3節　土坑

(1) D1号土坑

本址は調査区南東端のＬ－キ－８・９Grで検出された。形態は円形である。規模は径0.84mで、深さは0.52mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(2) D2号土坑

本址は調査区南より中央のＬ－ケ－７Grで検出された。形態は不整形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸が1.63m・短軸が0.67mである。深さは最大で0.23ｍを測る。本址からの出土遺物は小片の土師器坏と図示した陶器片と鉄製品があった。

(3) D3号土坑

本址は調査区南より中央のＬ－ク－７・８、Ｌ－ケ－７・８Grで検出された。形態は不整形で、規模は長軸が2.20m・短軸が1.00mである。深さは0.15ｍを測る。本址からの出土遺物は図示した打製石斧が１点あったのみである。

(4) D4号土坑

本址は調査区西よりのＭ－エ－７・８Grで検出された。東側が攪乱により削平されていた。形態は不整形で、規模は東西の残存部分が1.31m・南北が1.38mである。深さは0.67ｍを測る。本址からの出土遺物は欠損しているがスクレイパーが１点出土した。石材は八風山系の緻密黒色安山岩と考えられる。

(5) D5号土坑

本址は調査区西よりＭ－エ－７Grで検出された。東側が攪乱により削平されている。形態は不整形で、規模は東西の残存部分が0.95m・南北が0.95mである。深さは0.49ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(6) D6号土坑

本址は調査区西端のＭ－キー６・７Grで検出された。西側が攪乱により削平されている。形態は不整形で、規模は南北の長軸が2.58m・短軸が東西で1.32mである。深さは0.59ｍで、壁高は緩やかに立ち上がる。本址からの出土遺物は小片となった土師器坏片や土師器甕片があった。図示した遺物は磨石と刀子と考えられる鉄製品である。

(7) D7号土坑

本址は調査区南東端のＬ－カー８Grで検出された。形態は不整系で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は検出部分で東西が1.57m・南北が0.82mである。深さは最大で0.52ｍを測る。本址の覆土は下層のローム層が巻き上がる様な状態であり、いわゆる「風倒木痕」と考えられる。本址からの出土遺物は無かった。

(8) D8号土坑

本址は調査区東端のＬ－キー７Grで検出された。形態は楕円形で、長軸方位は東西を示す。規模は長軸が1.90m・短軸が1.03mである。深さは0.56ｍを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。本址からの出土遺物は図示した完形の土師器坏があった。土坑底面より浮いた状態で出土し、体部外面に「平」と考えられる墨書が確認できる。

(9) D9号土坑

本址は調査区北西端のＭ－カー４Grで検出された。形態は楕円形で、規模は南北の長軸が1.12m・東西の短軸が0.71mである。深さは0.69ｍを測る。本址からの出土遺物は小片であるが土師器坏と土師器甕があった。

(10) D10号土坑

本址は調査区中央のＭ－ア・イ－４Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が1.20mである。深さは0.29ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(11) D11号土坑

本址は調査区中央のＬ－コー４Grで検出された。形態は円形で、規模は径が0.71mである。深さは0.22ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(12) D12号土坑

本址は調査区中央のＬ－コー４Grで検出された。Ｄ11号土坑とはM2号溝状遺構に並列したような状態で検出された。形態は円形で、規模は径0.95mである。深さは0.27ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(13) D13号土坑

本址は調査区中央北よりのＬ－ク・ケ－３Grで検出された。形態は円形で、規模は径1.41mである。深さは最大0.14ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(14) D14号土坑

本址は調査区中央北よりのＬ－ケ－３Grで検出された。形態は円形で、規模は径1.00ｍである。深さは最大で0.17ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(15) D15号土坑

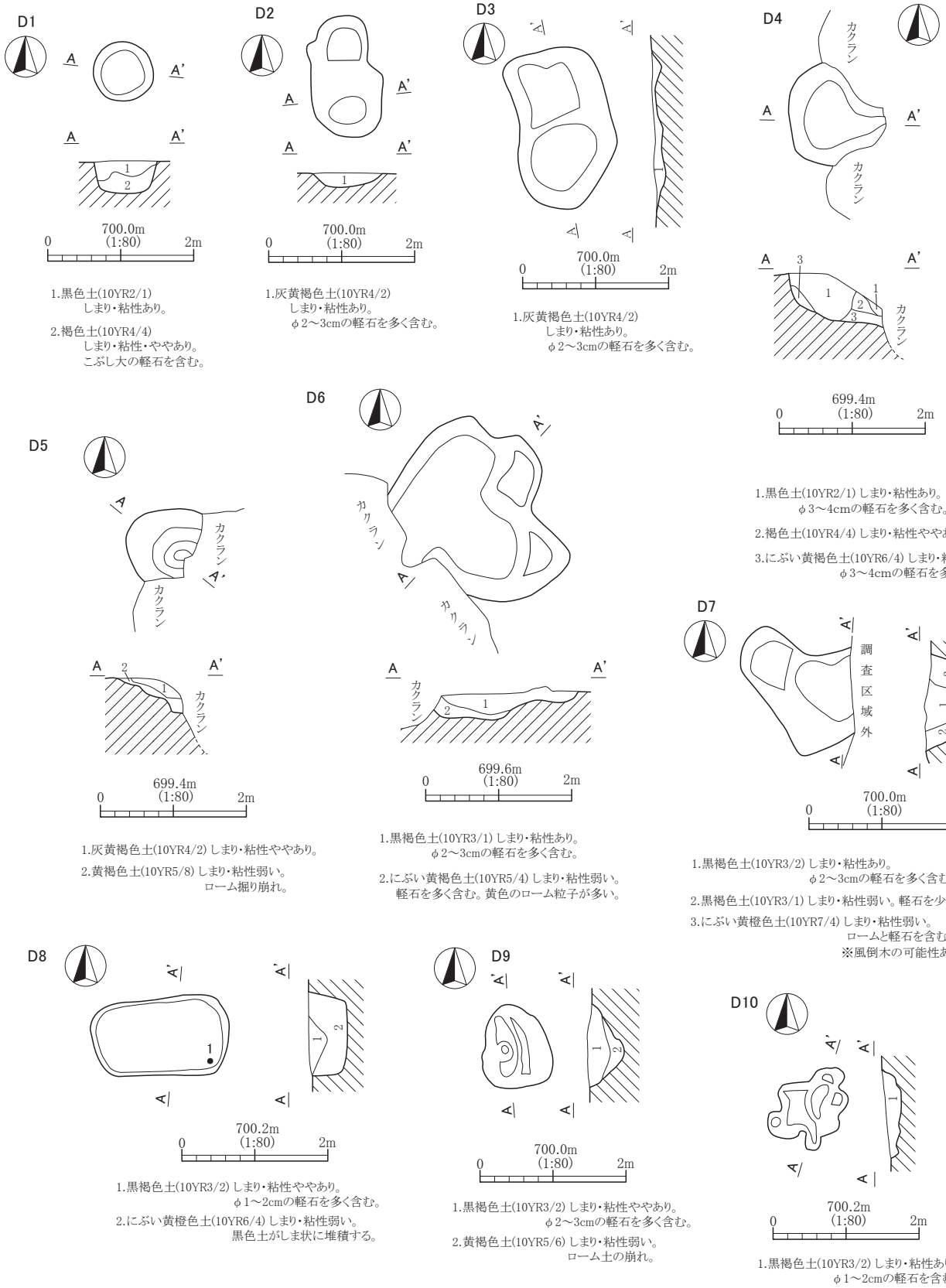
本址は調査区中央北よりＬ－ケ－２Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が1.47m・東西の短軸が1.10mである。深さは0.28ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(16) D16号土坑

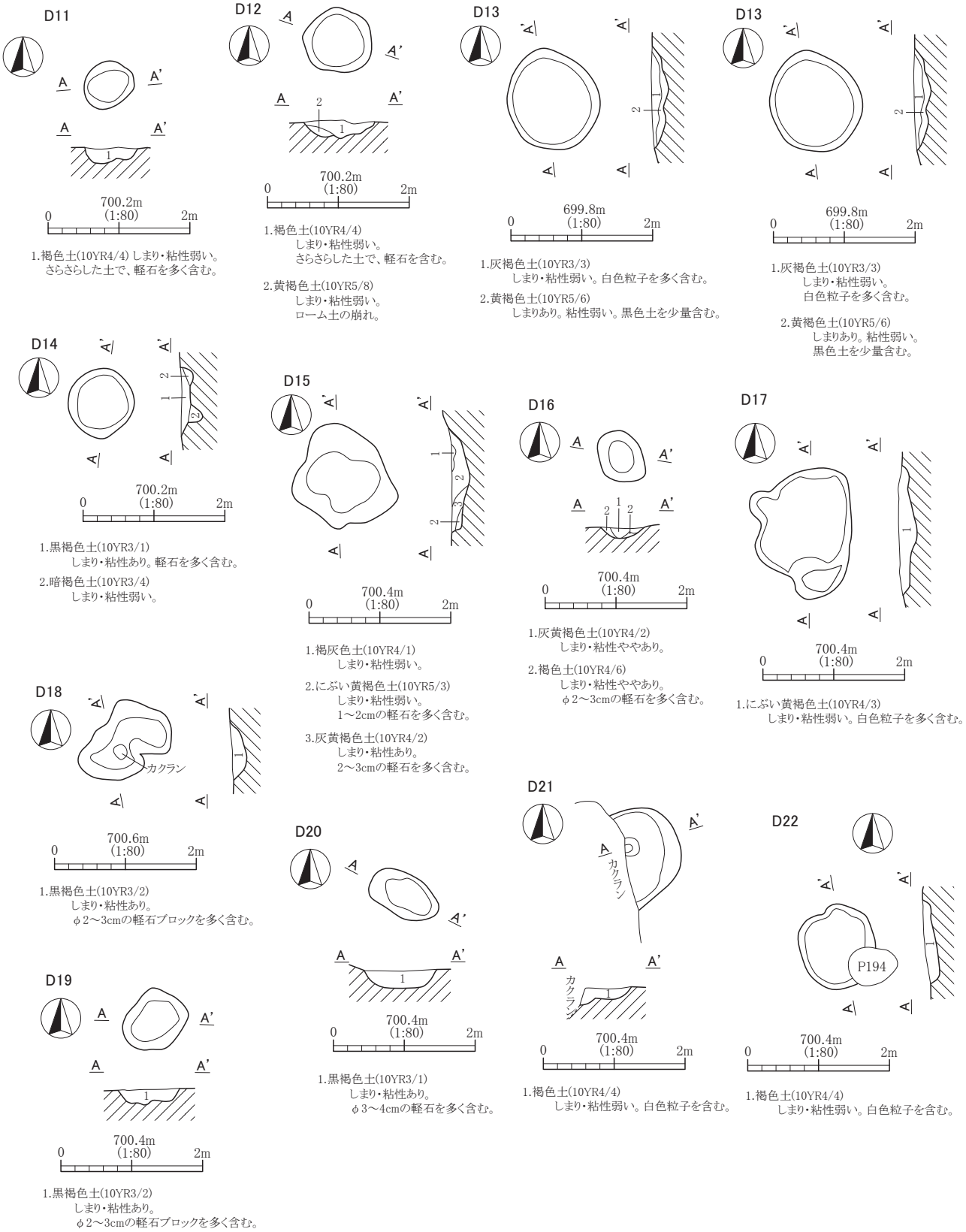
本址は調査区中央西よりのＭ－ウ－３Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北方向の長軸が0.82m・東西方向の短軸が0.53mである。深さは0.27ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(17) D17号土坑

本址は調査区中央北よりのＬ－ケ－２Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が1.82m・東西の短軸が1.26mである。深さは0.22ｍを測る。本址からの出土遺物は無かった。



第15図　D1～D10号土坑実測図



第16図　D11～D22号土坑実測図

第17図　D23～D27号土坑及び出土遺物実測図

(18) D18号土坑

本址は調査区中央北よりＬ－コ－２Grで検出された。形態は不整形で、規模は東西の長軸が1.42m・南北の短軸が0.69mである。深さは0.28mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(19) D19号土坑

本址は調査区中央北よりのＬ－コー２・３Grで検出された。形態は不整形で、規模は径0.96mを測る。深さは0.26mで、壁高は緩やかに立ち上がる。本址からの出土遺物は無かった。

(20) D20号土坑

本址は調査区中央北よりのＬ－カー２Grで検出された。形態は楕円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は東西が長軸で1.05m・南北が短軸で0.60mである。深さは最大で0.32mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(21) D21号土坑

本址は調査区東端のＬ－カー２・３Grで検出された。西側が攪乱により削平されている。形態は方形と考えられる。規模は南北軸が1.37m・東西軸が残存部分で0.73mである。深さは0.20mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(22) D22号土坑

本址は調査区東端のＬ－カー２Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が1.22m・東西の短軸が1.08mである。深さは0.18mを測る。本址からの出土遺物は小片であるが内面黒色処理された土師器坏があった。

(23) D23号土坑

本址は調査区中央北よりのＬ－クー１・２Grで検出された。形態は不整形で、規模は南北の長軸が0.98m・東西の短軸が0.51mである。深さは0.27mを測る。本址からの出土遺物は小片の土師器坏が出土した。

(24) D24号土坑

本址は調査区北よりのＬ－コー１・２Grで検出された。形態は楕円形で、規模は長軸が1.57m・短軸が0.94mである。深さは0.31mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(25) D25号土坑

本址は調査区東端のＬ－カ・キー２Grで検出された。Ｐ202に一部削平されている。形態は不整形で、規模は東西軸が残存で1.98m・南北軸が0.68mである。深さは0.20mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

第８表　土坑出土遺物観察表

D2	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値＜ ＞丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
2	前山焼き	徳利	－	－	－	ロクロナデ→施軸	ロクロナデ→施釉	断面実測 18C 末～ 19C 写真	

No.	器種	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	出土位置
1	不明	鉄	〈14.2〉	〈1.8〉	〈0.9〉	〈51.27〉	先端欠損か	
D3	**器種**	**素材**	**最大長**	**最大幅**	**最大厚**	**重量**	**備考**	**出土位置**
1	打製石斧	石	〈7.3〉	〈6.8〉	〈1.3〉	〈74.20〉	被熱なし　基部・刃部欠損　摩滅痕あり	
D4	**器種**	**素材**	**最大長**	**最大幅**	**最大厚**	**重量**	**備考**	**出土位置**
1	スクレイパー	石	〈6.1〉	〈3.8〉	〈1.2〉	〈28.09〉	被熱なし　右側欠損	
D6	**器種**	**素材**	**最大長**	**最大幅**	**最大厚**	**重量**	**備考**	**出土位置**
1	磨石	石	9.2	6.6	1.6	98.89	被熱なし　正裏にすり面　正面に条痕	
2	刃子	鉄	〈9.8〉	1.15	0.5	〈11.38〉	刃先・茎部欠損	

D8	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値＜ ＞丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	13.7	5.6	4.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸きり（右）→ 底部外周ヘラケズリ	完全実測 墨書あり（平）	

D27	種別	器種	法量			成形・調整・文様		推定値（ ）残存値＜ ＞丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面	備考	出土位置
1	土師器	坏	(14.6)	－	〈3.7〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	
2	土師器	武蔵甕	(18.3)	－	〈4.9〉	ヨコナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	回転実測	

(26) D26号土坑

本址は調査区中央北よりのＬ－ケ－１Grで検出された。形態は円形で、規模は径0.88mである。深さは最大0.42mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(27) D27号土坑

本址は調査区中央北端のＥ－キ・ク－９Grで検出された。形態は長方形で、規模は東西の長軸が1.39m・南北の短軸が1.10mである。深さは最大で0.36mを測る。

また、本址の北側には焼土を伴うピットが検出された。焼土の径は0.48m・焼土厚みは0.05mでよく焼けていた。土坑の覆土に炭化物等が確認された為、土坑と関連があると考え一体で報告した。本址からの出土遺物は図示した土師器坏と土師器甕の他に、小片であるが須恵器坏片と須恵器甕片があった。

第3節　溝状遺構

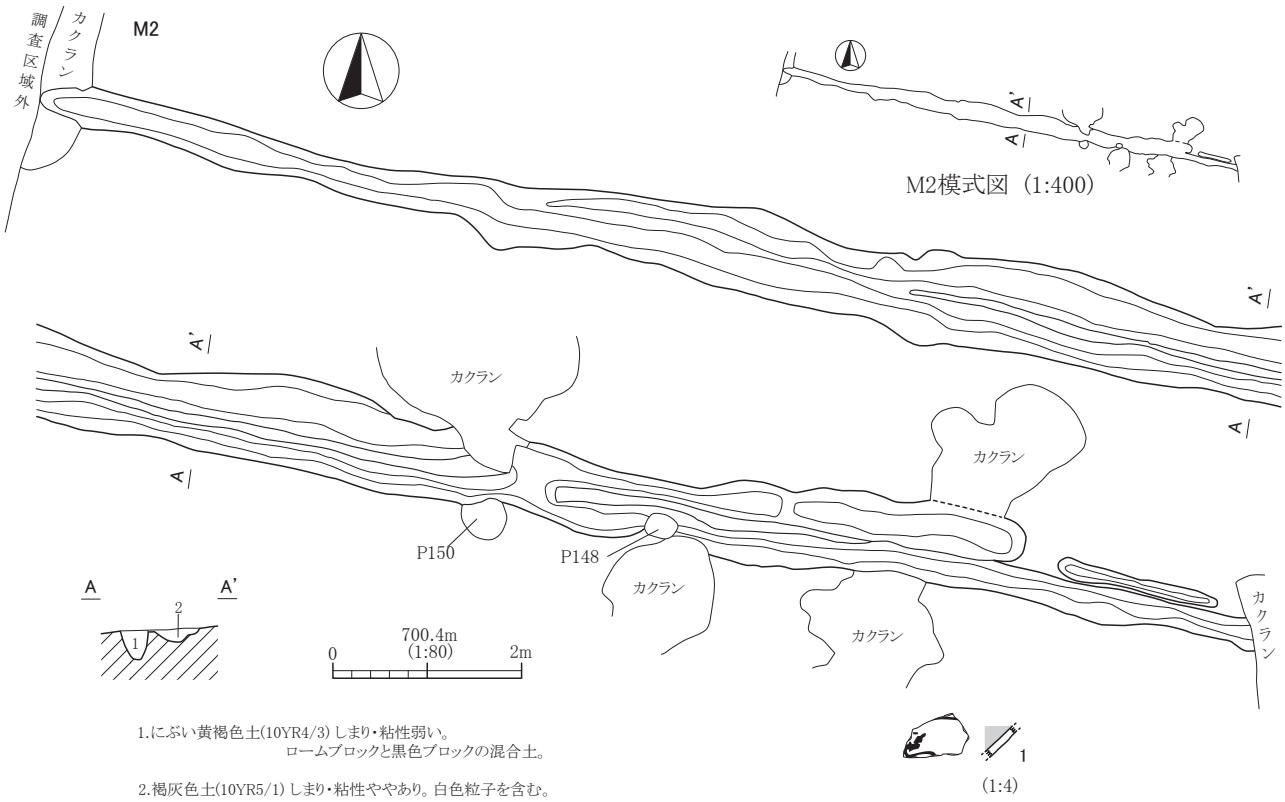
(1) M1号溝状遺構

本址は調査区西端のＭ－カ－４～６Grで検出された。北側が調査区域外となる為全容は不明である。形態は逆台形状を呈する。規模は検出部分で長さ7.40m、幅は0.23～0.38m、深さは0.16～0.26mを測る。本址からの出土遺物は無かった。

(2) M2号溝状遺構

本址は調査区中央のＬ－キ・ク・ケ－４、Ｍ－ア・イ・ウ－３Grで検出された。検出された溝の長さは24.50m、幅は0.13～0.97m、深さは0.12～0.38mを測る。本址は一部で深さの異なる２本の溝が並走する。

本址からは図示した遺物の他に須恵器坏・甕、弥生土器片が出土している。



第18図　Ｍ２号溝状遺構及び出土遺物実測図

(3) M3号溝状遺構

本址は調査区南端のＬ－ケ－５～９Grで検出された。南側が調査区域外となる為全容は不明である。また、一部が浅いため途切れ途切れの検出となった。形態は逆台形状を呈する。規模は検出部分で長さ15.24m、幅は0.06～0.36m、深さは0.04～0.34mを測る。本址からの出土遺物は図示した土器の他、内面黒色処理された土師器坏片や須恵器甕片があった。

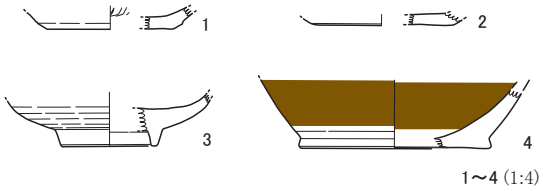
第4節　単独ピットと遺構外出土遺物

今回調査では、単独ピットとして225個のピットを調査した。ピットの分布は調査区内で片寄があり、主に調査区中央からの検出が多かった。

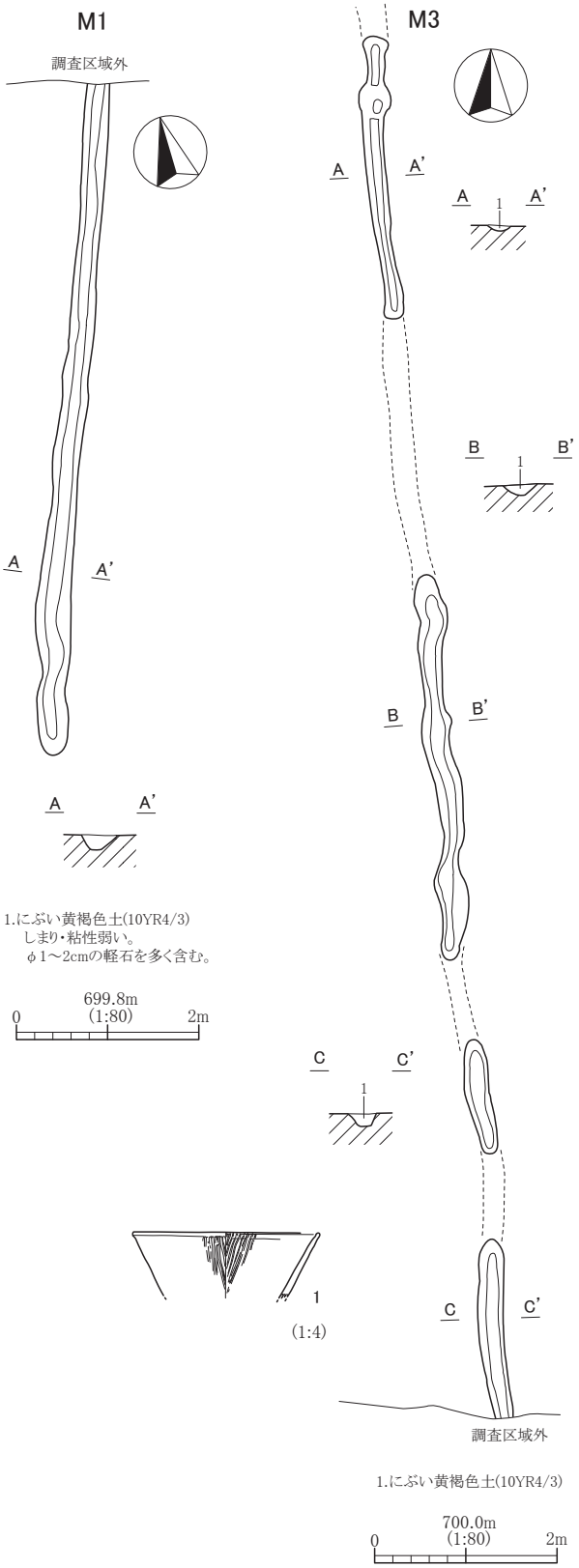
形態は円形や不整形が多かったが、Ｐ229のように方形のものも少ないが確認された。規模は径0.20～0.50m・深さ0.10～0.40mを測るものが多かった。柱痕等が確認されたものは無かった。規則的な配列を示すものは少なかったが、Ｐ41～Ｐ43の３個は東西に並び、柵列的な状況を示す。また、Ｐ75・Ｐ78・Ｐ81・Ｐ98も東西方向にピットが並び柵列的な使用が考えられる。

各ピットからの出土遺物は第11表に掲載したが、いずれも小片であり、唯一Ｐ218の内面黒色処理された土師器坏だけが、形状が解るものであった。

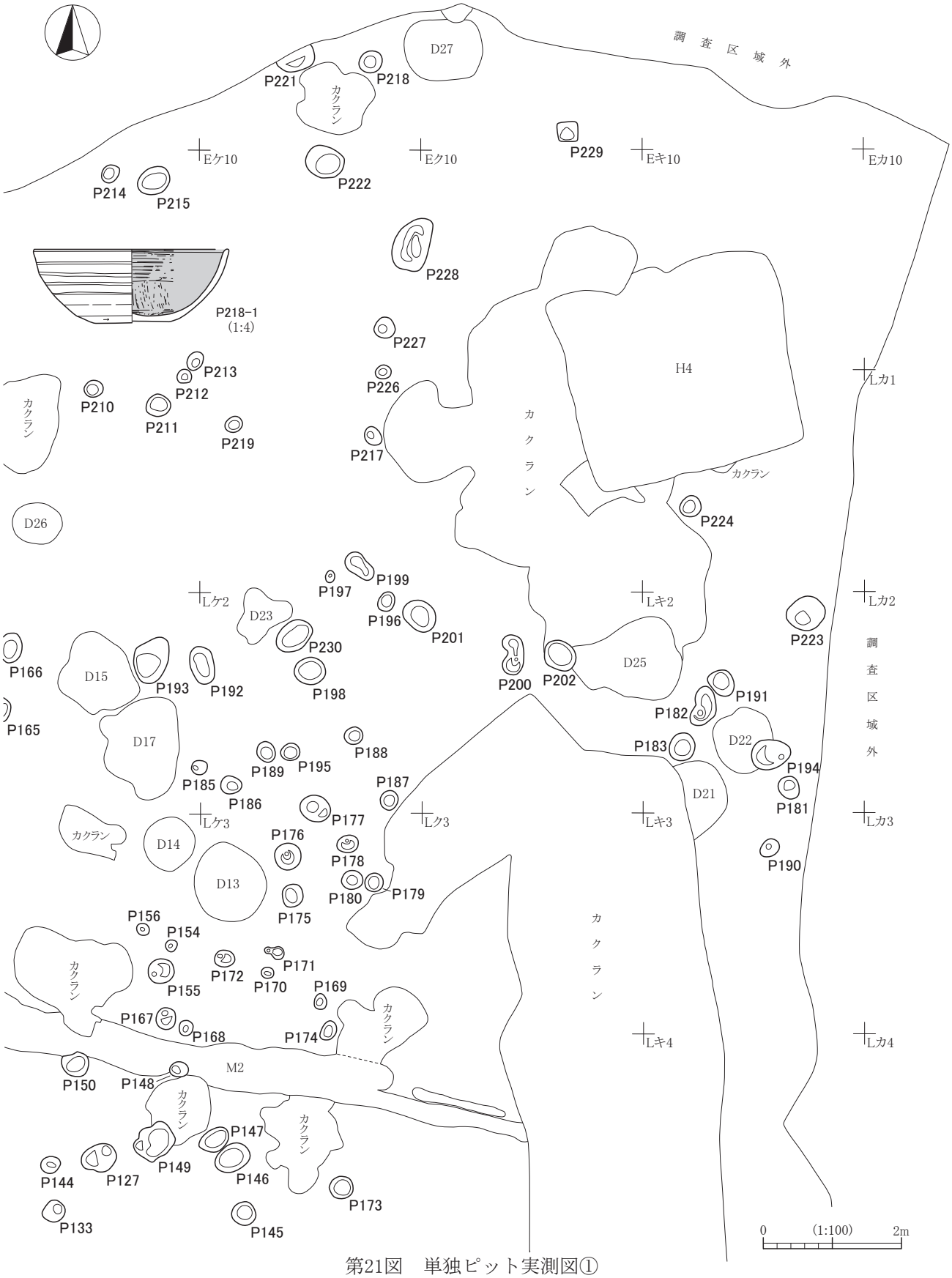
遺構外出土遺物は４点を図示した。1と２は小片であるため確証を得ないが、所謂、カワラケの底部付近と考えられる。いずれも底部に糸切痕がある。３は17世紀後半の伊万里皿である。４は在地の前山焼き鉢で、鉄釉が確認できる。



第19図　遺構外出土遺物実測図

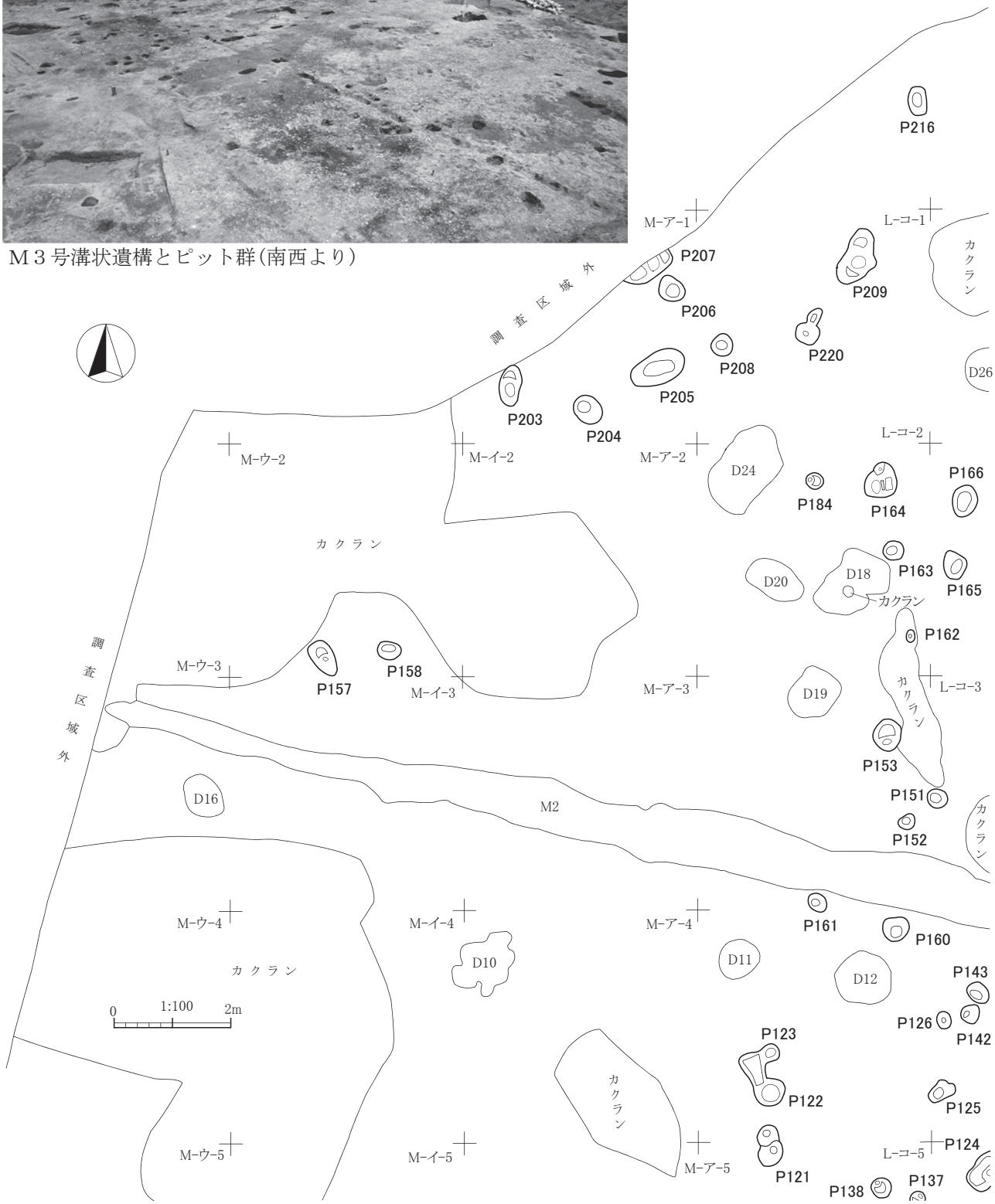


第20図　Ｍ１・３号溝状遺構実測図

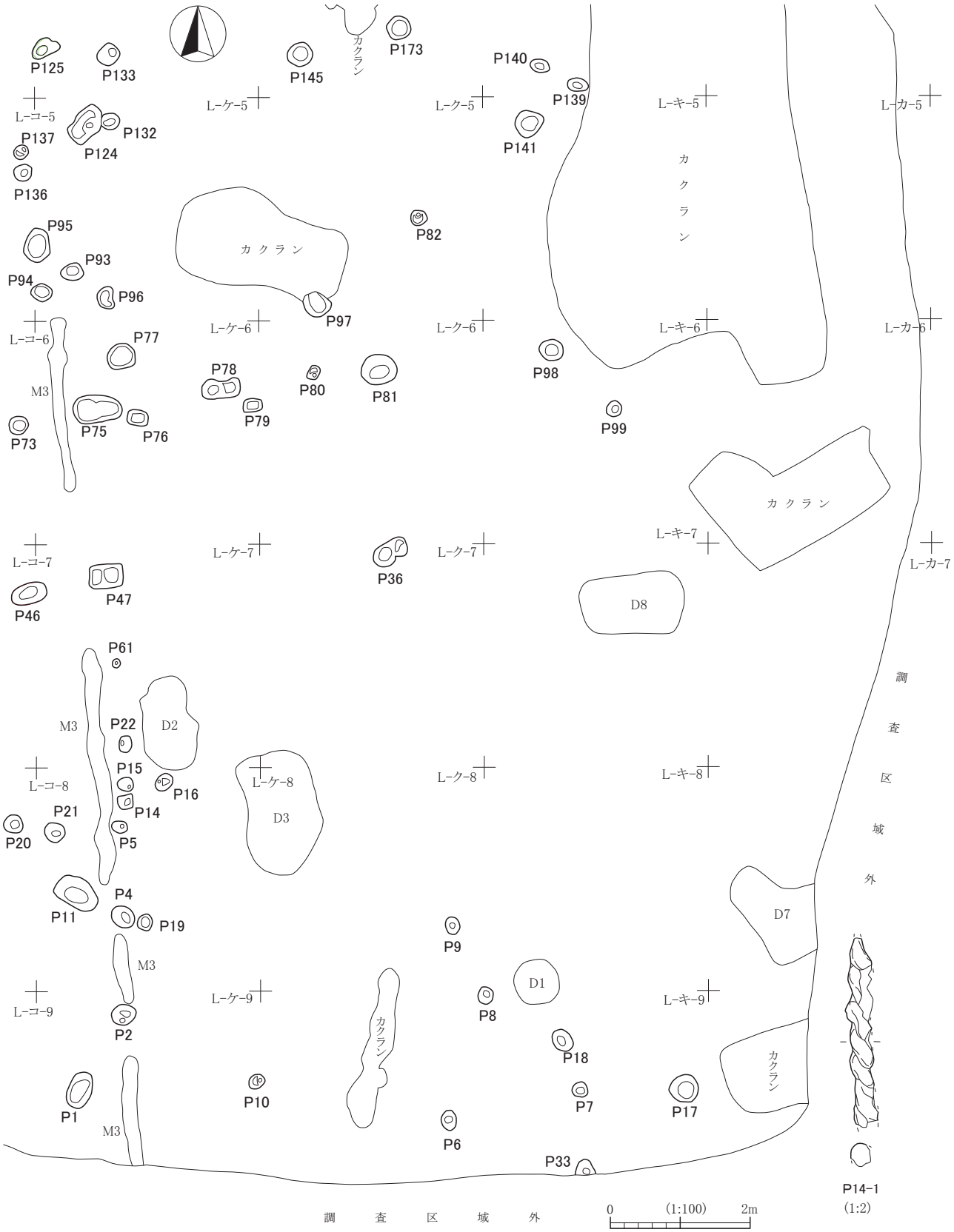


第21図　単独ピット実測図①

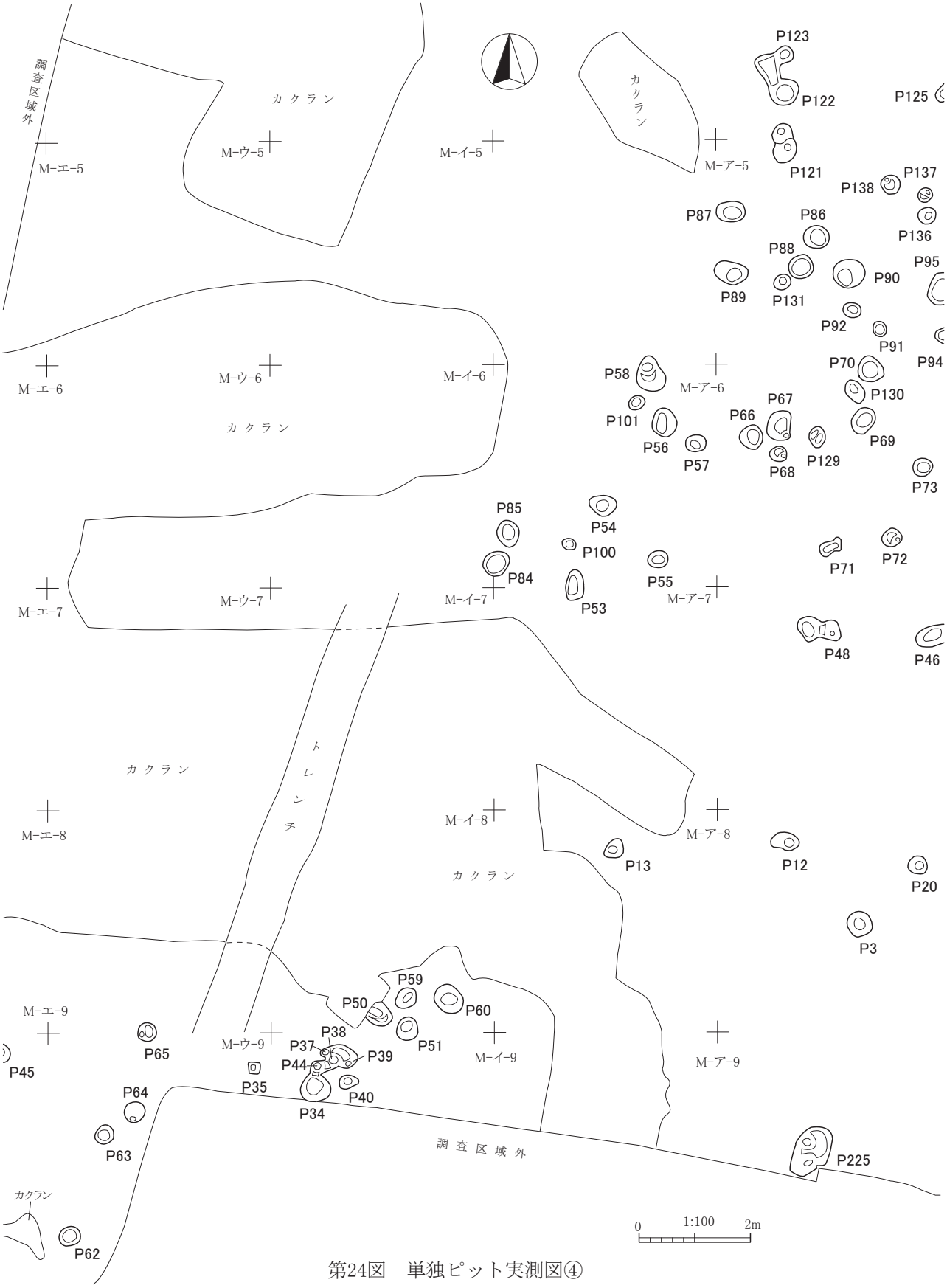
Ｍ３号溝状遺構とピット群（南西より）



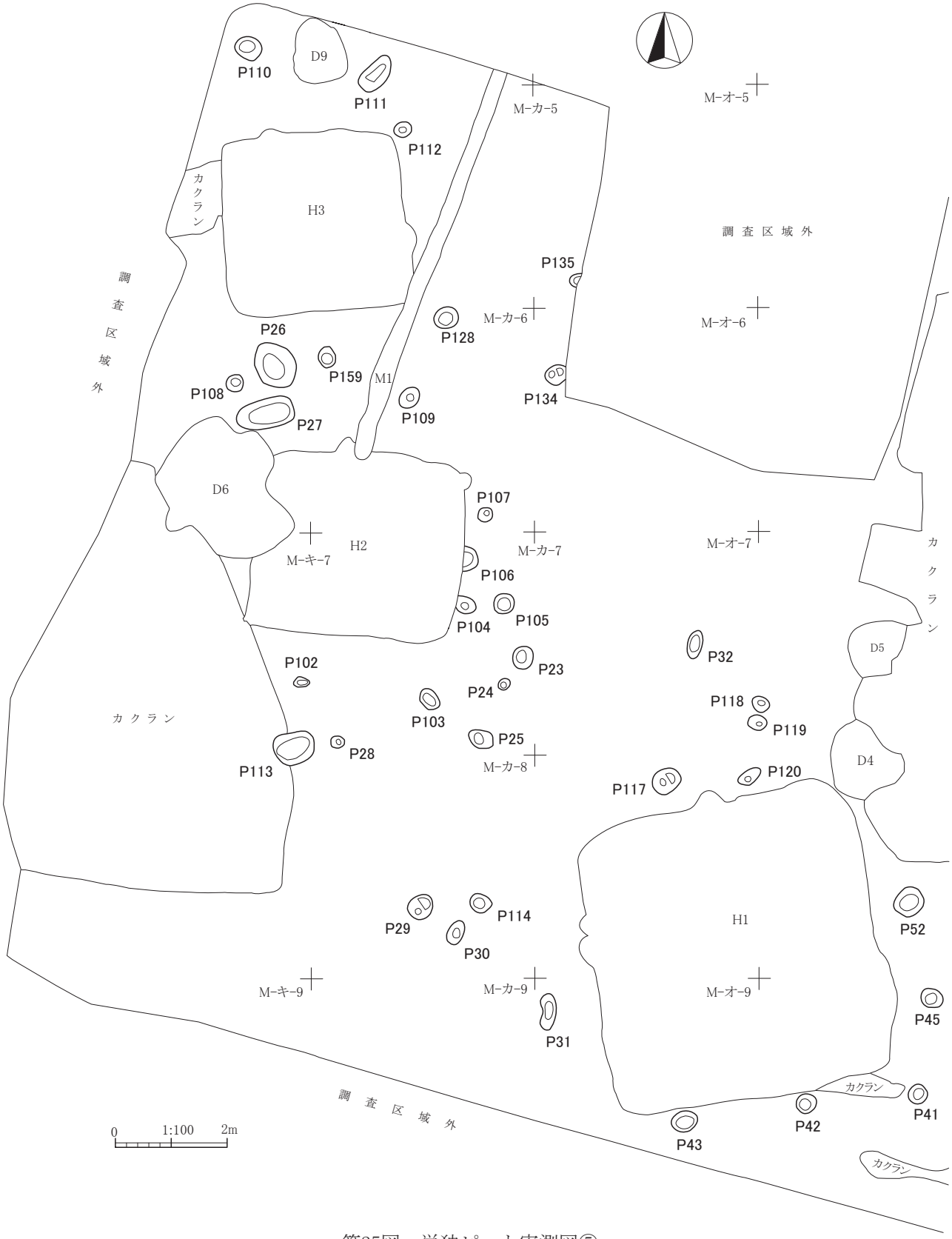
第22図　単独ピット実測図②



第23図　単独ピット実測図③



第24図　単独ピット実測図④



第25図　単独ピット実測図⑤

第９表　ピット計測表①

（　）推定〈　〉残存（単位 cm）

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物 重複関係	備　　考
P1	L-ケ-9	64.0	41.0	22.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P2	L-ケ-9	40.0	38.0	27.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P3	L-コ-8	47.0	46.0	11.0	円形		褐灰色土（10YR5/1） しまり弱い　砂を含む
P4	L-ケ-8	45.0	36.0	31.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P5	L-ケ-8	27.0	19.0	48.0	楕円形		灰黄褐色土（10YR4/2） しまり弱い
P6	L-ク-9	36.0	28.0	17.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P7	L-キ-9	29.0	26.0	16.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P8	L-キ・ク-8・9	31.0	28.0	26.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P9	L-ク-8	30.0	25.0	27.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P10	L-ク・ケ-9	30.0	24.0	16.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P11	L-ケ-8	81.0	52.0	28.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P12	L-コ-8	51.0	30.0	28.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P13	M-ア-8	36.0	32.0	14.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P14	L-ケ-8	27.0	26.0	22.0	方形	土師器 内黒坏１片	褐灰色土（10YR5/1）
P15	L-ケ-8	29.0	24.0	23.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P16	L-ケ-8	35.0	26.0	29.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P17	L-キ-9	50.0	48.0	17.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P18	L-キ-9	42.0	33.0	31.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P19	L-ケ-8	30.0	28.0	9.0	円形		暗褐色土（10YR3/3）
P20	L-コ-8	34.0	32.0	19.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P21	L-ケ-8	37.0	34.0	19.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P22	L-ケ-7	31.0	24.0	28.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P23	M-カ-7	41.0	36.0	20.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P24	M-カ-7	22.0	22.0	17.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P25	M-カ-7	48.0	36.0	25.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P26	M-キ-6	91.0	70.0	41.0	楕円形	土師器内黒坏 ６片 武蔵甕４片	黒褐色土（10YR3/2）
P27	M-キ-6	106.0	54.0	25.0	楕円形	土師器内黒坏５ 片 坏1片 甕３片	黒褐色土（10YR3/2）
P28	M-カ-7	26.0	22.0	14.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P29	M-カ-8	45.0	44.0	32.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P30	M-カ-8	45.0	29.0	36.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P31	M-オ-9	65.0	29.0	15.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P32	M-オ-7	52.0	27.0	11.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P33	L-キ-9	〈30.0〉	36.0	23.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P34	M-イ-9	52.0	50.0	49.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P35	M-ウ-9	23.0	22.0	31.0	方形		黒褐色土（10YR3/2）
P36	L-ク-6・7	67.0	38.0	33.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P37	M-イ-9	－	－	47.0	－		黒褐色土（10YR3/2）
P38	M-イ-9	－	－	54.0	－		黒褐色土（10YR3/2）
P39	M-イ-9	－	－	43.0	－		黒褐色土（10YR3/2）
P40	M-イ-9	35.0	25.0	48.0	不整形		黒褐色土（10YR3/2）
P41	M-エ-9	38.0	33.0	28.0	円形		黒色土（10YR2/1）
P42	M-エ-9	38.0	38.0	35.0	円形		黒色土（10YR2/1）
P43	M-オ-9	49.0	36.0	34.0	楕円形		黒色土（10YR2/1）
P44	M-イ-9	40.0	22.0	49.0	楕円形		黒色土（10YR2/1）
P45	M-エ-9	40.0	34.0	23.0	円形		黒色土（10YR2/1）
P46	L-ケ・コ-7	69.0	36.0	31.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P47	L-ケ-7	61.0	43.0	44.0	方形		褐灰色土（10YR5/1）
P48	L-コ-7	75.0	45.0	21.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P50	M-イ-8	〈44.0〉	40.0	32.0	楕円形		黒色土（10YR2/1）
P51	M-イ-8	41.0	40.0	47.0	円形		黒色土（10YR2/1）
P52	M-エ-8	54.0	53.0	12.0	円形		黒褐色土（10YR2/1） しまり・粘性あり
P53	M-ア-6・7	56.0	33.0	19.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P54	M-ア-6	50.0	39.0	18.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P55	M-ア-6	38.0	30.0	19.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P56	M-ア-6	52.0	44.0	16.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P57	M-ア-6	37.0	30.0	22.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P58	M-ア-5・6	64.0	51.0	42.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P59	M-イ-8	42.0	37.0	24.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P60	M-イ-8	54.0	48.0	40.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P61	M-ケ-7	15.0	14.0	22.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物 重複関係	備　　考
P62	M-ウ-9	40.0	34.0	20.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P63	M-ウ-9	36.0	34.0	31.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P64	M-ウ-9	37.0	34.0	94.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P65	M-ウ-8・9	33.0	32.0	29.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P66	L-コ-6	44.0	41.0	18.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P67	L-コ-6	53.0	42.0	17.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P68	L-コ-6	32.0	24.0	25.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P69	L-コ-6	53.0	36.0	22.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P70	L-コ-5・6	50.0	46.0	20.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P71	L-コ-6	44.0	18.0	11.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P72	L-コ-6	36.0	32.0	29.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P73	L-コ-6	35.0	32.0	10.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P75	L-ケ-6	86.0	49.0	41.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P76	L-ケ-6	38.0	25.0	21.0	方形		褐灰色土（10YR5/1）
P77	L-ケ-6	48.0	43.0	13.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P78	L-ケ-6	70.0	32.0	52.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P79	L-ク・ケ-6	34.0	24.0	16.0	方形		褐灰色土（10YR5/1）
P80	L-ク-6	26.0	20.0	37.0	方形		褐灰色土（10YR5/1）
P81	L-ク-6	64.0	53.0	62.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P82	L-ク-5	29.0	26.0	36.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P84	M-ア・イ-6	49.0	42.0	17.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P85	M-ア-6	49.0	40.0	24.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P86	L-コ-5	47.0	42.0	17.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P87	L-コ-5	50.0	39.0	14.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P88	L-コ-5	45.0	42.0	20.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P89	L-コ-5	61.0	41.0	16.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P90	L-コ-5	55.0	52.0	25.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P91	L-コ-5	27.0	23.0	14.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P92	L-コ-5	30.0	26.0	16.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P93	L-ケ-5	42.0	30.0	15.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P94	L-ケ・コ-6	38.0	32.0	13.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P95	L-ケ・コ-6	58.0	46.0	10.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P96	L-ケ-5	38.0	26.0	12.0	不整形		黒褐色土（10YR3/2）
P97	L-ク-5	〈48.0〉	43.0	27.0	－		褐灰色土（10YR5/1）
P98	L-キ-6	43.0	37.0	58.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P99	L-キ-6	28.0	26.0	8.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P100	M-ア-6	23.0	21.0	13.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P101	M-ア-6	28.0	23.0	29.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P102	M-キ-7	29.0	18.0	3.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P103	M-カ-7	42.0	30.0	17.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P104	M-カ-7	〈36.0〉	28.0	16.0	楕円形	H2 より古	黒褐色土（10YR3/2）
P105	M-カ-7	36.0	35.0	18.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P106	M-カ-7	〈30.0〉	43.0	43.0	－	H2 より古	黒褐色土（10YR3/2）
P107	M-カ-6	26.0	24.0	17.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P108	M-キ-6	30.0	29.0	24.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P109	M-カ-6	40.0	33.0	33.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P110	M-キ-4	50.0	42.0	28.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P111	M-カ-4・5	63.0	38.0	19.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P112	M-カ-5	32.0	28.0	25.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P113	M-キ-7・8	81.0	60.0	22.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P114	M-カ-8	40.0	35.0	32.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P117	M-オ-8	52.0	41.0	23.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P118	M-エ・オ-7	33.0	27.0	20.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P119	M-エ・オ-7	34.0	27.0	17.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P120	M-オ-8	46.0	26.0	48.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P121	L-コ-4・5	69.0	36.0	20.0	不整形		黒褐色土（10YR3/2）
P122	L-コ-4	－	－	23.0	－		黒褐色土（10YR3/2）
P123	L-コ-4	－	－	21.0	－		黒褐色土（10YR3/2）
P124	L-ケ-5	73.0	50.0	25.0	不整形		黒褐色土（10YR3/2）
P125	L-ケ・コ-4	50.0	31.0	21.0	不整形		黒褐色土（10YR3/2）
P126	L-ケ-4	29.0	24.0	37.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P127	L-ケ-4	61.0	46.0	32.0	不整形		黒褐色土（10YR3/2）
P128	M-カ-5・6	44.0	39.0	23.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P129	L-コ-6	33.0	30.0	18.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P130	L-コ-6	42.0	29.0	12.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P131	L-コ-5	28.0	24.0	17.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）

第 10 表　ピット計測表②

（　）推定〈　〉残存（単位 cm）

遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物 重複関係	備　　考	遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物 重複関係	備　　考
P132	L-ケ-5	34.0	29.0	22.0	不整形		黒褐色土（10YR3/2）	P183	L-カ-2	49.0	47.0	12.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P133	L-ケ-4	38.0	37.0	23.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P184	L-コ-2	30.0	25.0	34.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P134	M-オ-6	43.0	36.0	26.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P185	L-ク・ケ-2	30.0	20.0	17.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P135	M-オ-5	26.0	〈18.0〉	10.0	－		黒褐色土（10YR3/2）	P186	L-ク-2	40.0	28.0	27.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P136	L-コ-5	33.0	28.0	10.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P187	L-ク-2	35.0	29.0	15.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P137	L-コ-5	26.0	23.0	21.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P188	L-ク-2	34.0	32.0	20.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P138	L-コ-5	34.0	32.0	19.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P189	L-ク-2	40.0	30.0	16.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P139	L-キ-4	39.0	25.0	15.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P190	L-カ-3	35.0	28.0	20.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P140	L-キ-4	35.0	25.0	10.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P191	L-カ-2	50.0	40.0	27.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P141	L-キ-5	52.0	40.0	18.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P192	L-ク・ケ-2	67.0	37.0	13.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P142	L-ケ-4	30.0	27.0	33.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P193	L-ケ-2	90.0	52.0	21.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P143	L-ケ-4	40.0	29.0	10.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P194	L-カ-2	67.0	36.0	83.0	楕円形	D22 より新	黒褐色土（10YR3/2）
P144	L-ケ-4	34.0	29.0	11.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P195	L-ク-2	34.0	32.0	10.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P145	L-ク-4	44.0	40.0	20.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P196	L-ク-1・2	35.0	25.0	14.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P146	L-ク-4	68.0	50.0	22.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P197	L-ク-1	20.0	15.0	20.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P147	L-ク・ケ-4	58.0	40.0	17.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P198	L-ク-2	55.0	50.0	16.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P148	L-ケ-4	35.0	26.0	26.0	円形	M2 より新	褐灰色土（10YR5/1）	P199	L-ク-1	60.0	28.0	15.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P149	L-ケ-4	75.0	62.0	26.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）	P200	L-キ-2	70.0	35.0	36.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P150	L-ケ-4	48.0	42.0	34.0	円形	M2 より新	褐灰色土（10YR5/1）	P201	L-キ・ク-2	65.0	46.0	21.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P151	L-ケ・コ-3	36.0	33.0	26.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P202	L-キ-2	64.0	47.0	19.0	楕円形	D25 より新	褐灰色土（10YR5/1）
P152	M-ア-3	30.0	22.0	16.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P203	M-ア-1	70.0	35.0	26.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P153	L-コ-3	55.0	41.0	34.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P204	M-ア-1	55.0	41.0	25.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P154	L-ケ-3	24.0	22.0	19.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P205	M-ア-1	99.0	50.0	43.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P155	L-ケ-3	46.0	37.0	33.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P206	M-ア-1	50.0	38.0	15.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P156	L-ケ-3	23.0	21.0	69.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P207	M-ア-1	93.0	30.0	29.0	－		褐灰色土（10YR5/1）
P157	M-イ-2	65.0	37.0	57.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）	P208	L-コ-1	38.0	37.0	14.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P158	M-イ-2	40.0	30.0	19.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）	P209	L-コ-1	99.0	47.0	47.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P159	M-カ-6	40.0	29.0	15.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）	P210	L-ケ-1	32.0	27.0	21.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P160	L-コ-4	46.0	40.0	36.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P211	L-ケ-1	45.0	32.0	16.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P161	L-コ-3・4	34.0	27.0	25.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）	P212	E-ケ-10 L-ケ-1	26.0	23.0	16.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P162	L-コ-2	22.0	14.0	27.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）								
P163	L-コ-2	37.0	29.0	49.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P213	E-ク・ケ-10	37.0	29.0	12.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P164	L-コ-2	58.0	30.0	44.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）	P214	E-ケ-10	34.0	30.0	20.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）
P165	L-ケ-2	50.0	35.0	43.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）	P215	E-ケ-10	60.0	40.0	56.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P166	L-ケ-2	55.0	38.0	19.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P216	E-コ-10	47.0	30.0	20.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P167	L-ケ-3	40.0	25.0	26.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）	P217	L-ク-1	40.0	24.0	23.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P168	L-ケ-3・4	29.0	28.0	25.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P218	E-ク-9	44.0	40.0	23.0	円形	土師器 武蔵甕 12 片	黒褐色土（10YR3/2）
P169	L-ク-3	30.0	23.0	10.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）								
P170	L-ク-3	21.0	18.0	21.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P219	L-ク-1	30.0	27.0	8.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P171	L-ク-3	36.0	13.0	35.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）	P220	L-コ-1	64.0	46.0	23.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）
P172	L-ク-3	36.0	25.0	48.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P221	E-ク-9	64.0	〈34.0〉	48.0	－		褐灰色土（10YR5/1）
P173	L-ク-4	42.0	40.0	18.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P222	E-ク-9・10	68.0	52.0	50.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）
P174	L-ク-3・4	34.0	25.0	19.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P223	L-カ-2	67.0	55.0	24.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P175	L-ク-3	40.0	35.0	30.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P224	L-カ-1	38.0	37.0	5.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P176	L-ク-3	48.0	48.0	30.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）	P225	L-コ-9	95.0	48.0	31.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P177	L-ク-2・3	59.0	44.0	27.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）	P226	E-ク-10 L-ク-1	29.0	23.0	19.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P178	L-ク-3	35.0	31.0	17.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）								
P179	L-ク-3	36.0	35.0	23.0	円形		褐灰色土（10YR5/1）	P227	E-ク-10	39.0	35.0	8.0	円形		黒褐色土（10YR3/2）
P180	L-ク-3	39.0	33.0	23.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P228	E-キ・ク-10	105.0	62.0	45.0	楕円形		黒褐色土（10YR3/2）
P181	L-カ-2	41.0	29.0	24.0	楕円形		褐灰色土（10YR5/1）	P229	E-キ-9	35.0	35.0	54.0	方形		褐灰色土（10YR5/1）
P182	L-カ-2	72.0	36.0	25.0	不整形		褐灰色土（10YR5/1）	P230	L-ク-2	69.0	47.0	13.0	楕円形		

第 11 表　溝状遺構・単独ピット・遺構外出土遺物観察表

	種別	器種	法　量			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		推定値（ ）残存値〈 〉丸底●	
			口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内　面	外　面	備　考	出土位置
M 2-1	土師器	坏	－	－	－	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測 墨書あり	Ⅱ区
M 3-1	土師器	坩	(10.2)	－	〈3.6〉	ミガキ	ミガキ	回転実測	ケン
P218-1	土師器	坏	14.1	5.4	5.3	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→ミガキ→底部と底部外周回転ヘラケズリ	完全実測	
Gr-1	土師質	かわらけ	－	(6.8)	〈1.2〉	ミガキ	ロクロナデ→底部回転糸切り→ナデ？	回転実測	M-キ-7
Gr-2	土師質	かわらけ	－	(7.6)	〈0.7〉	ロクロナデ	ロクロナデ→底部糸切り	回転実測	M-キ-8
Gr-3	白磁	皿	－	(5.2)	〈2.8〉	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ（高台削り出し）→施釉	回転実測	L-キ-9
Gr-4	前山焼き	鉢	－	(10.2)	〈3.6〉	ロクロナデ→施釉（鉄釉）	ロクロナデ→施釉（鉄釉）	回転実測 19C	L-ケ-3

単Ｐ	器　種	素　材	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備考	出土位置
P14-1	不明	鉄	〈6.8〉	〈0.9〉	〈0.9〉	〈7.38〉	両端・裏面欠損　螺旋状	

第Ⅴ章　調査のまとめ

今回、発掘調査が行われた野馬窪遺跡Ⅶの周辺は、過去に数次の発掘調査がおこなわれ地点別の遺跡状況が把握されている場所がある。また、各種の開発に先立ち試掘・確認調査がおこなわれ、所産時期までは確定できないが遺構の広がりを確認している部分もある。本章ではこれらの成果も含め(第26図参照)今回の調査地点の成果をまとめてみたい。

周辺部で行われた発掘調査で規模の大きな箇所は２か所である。まず、平成20年度に行われた野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲで7000㎡が調査されている。検出された遺構は９世紀後半の竪穴住居１棟、中世の竪穴建物址17棟、掘立柱建物址13棟、土坑234基、溝址17条である。報告者は遺跡の性格を、２重の方形？区画溝に囲まれた館が12世紀後半に創建され、13世紀末に廃絶され、14世紀代には一般の居住域となるが、掘立柱建物址と竪穴建物址が重複しないことから、館的な様相も残しているとまとめている。これに対して、野馬窪遺跡Ⅳは平成24・25年度に、7468㎡の発掘調査が行われた。検出された遺構は古墳時代から平安時代の竪穴住居址27軒、掘立柱建物址２棟、土坑13基、溝状遺構８条等である。Ⅳ地点の調査では中世と考えられる遺構はほとんど検出されず、古代集落址の一部と考えられる住居址群が調査された。これを裏付けるように、Ⅳ地区に接する台地西側縁の試掘・確認調査では28軒以上の竪穴住居址が確認されている。今回の調査地点もこれら集落範囲に含まれると考えられる。

このように、この台地は場所により時代毎の使用目的が大きく異なる事が解る。台地西側縁にかけては主に平安時代の集落の一部として使用され、不確実ではあるが一時期20軒以上の住居が台地縁に沿って300m以上の広さで展開していたことが想像できる。また、台地内部は中世の館或いは集落として使用され、平安時代の集落は台地内部までは展開しない。これら時代による使用変化は、いかなる理由で起こるのであろうか。一つの考えとして「水」の問題がある。中世の館内には10か所の井戸(生活用水としての井戸かは確定していない)と考えられる土坑が発見されているが、平安時代の集落域には井戸的な遺構は発見されていない。このことは、集落内の水利用形態に関して、時代により変化があることを示しているのではないだろうか。概略で示すと古代集落は河川や雨水利用。中世段階より井戸利用というものである。確かに、本地域では古代の集落を調査しても井戸の発見が少く、12世紀以降の遺跡になると井戸が多く検出されるように感じられる。今回は集成等の裏付けなく書きすすめたが、これが肯定されれば、佐久地域の特徴なのか或るは山間部という地域だからなのか。様々な問題も派生する。今後一考の必要がある課題と考える。

最後に、今回の調査でも検出された溝址の問題に触れたい。第26図で示したように周辺部には調査により何本かの溝址が検出されている。特徴的なのはⅡ・Ⅲ区で検出された２本のＬ字に屈曲する溝址である。この溝址が中世の館を構成する要素と考えられているが、周辺全体を巨視的にみると同じようにＬ字に屈曲する溝址があり、「一町四方」を想定できる部分もある。各溝址の同時性は検証しなければならないが、溝址の検出状況からⅣ区の中世館は所謂「方形館」として想定しにくい状況である。逆にいくつかのＬ字やコ字に囲まれたエリアが存在し、溝で囲まれた範囲は無遺構地帯であったりと様々な形態で利用されている様子がうかがえる。これらの溝址が中世の所産ということであれば、先に示した水利用の問題も含め、12世紀末～14世紀にかけてのこれら中世遺構群の性格や選地理由も明らかになっていくのではないだろうか。

以上、検証なしに書き進めたが、調査のまとめとして触れた先の二つの点は、まとめというより課題であり、今後の周辺部での調査事例の追加をまって検証していかなければならない問題であろう。以上雑駁なまとめとなったが、発掘調査で明らかにされる遺跡の広がりはごく限られた範囲であることに改めて気づかされた調査となった。

図版一

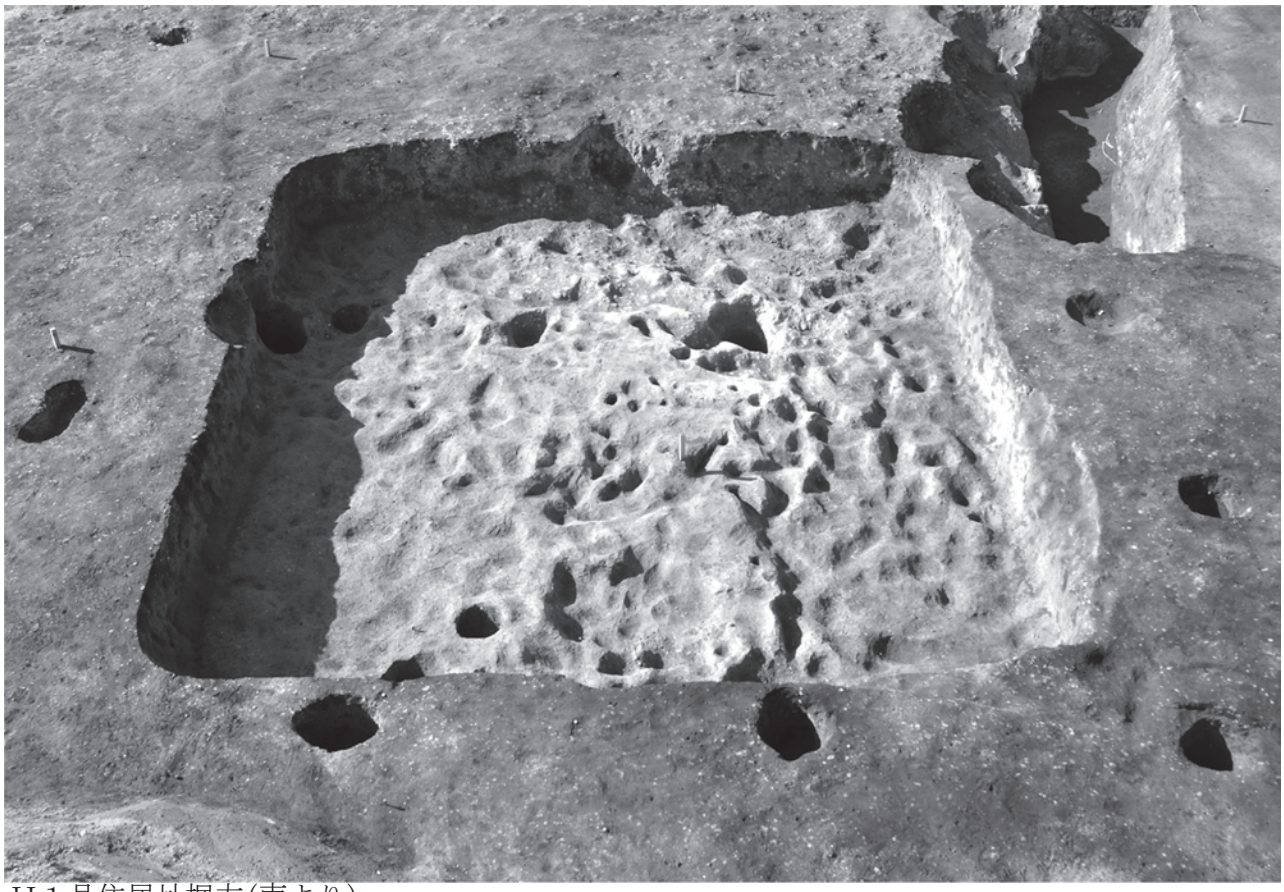
調査区周辺航空写真（東洋航空事業株式会社撮影　1972年）

図版二

野馬窪遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ(株式会社こうそく撮影　平成６年)

調査区近景(西より　表土掘削・遺構確認状況)

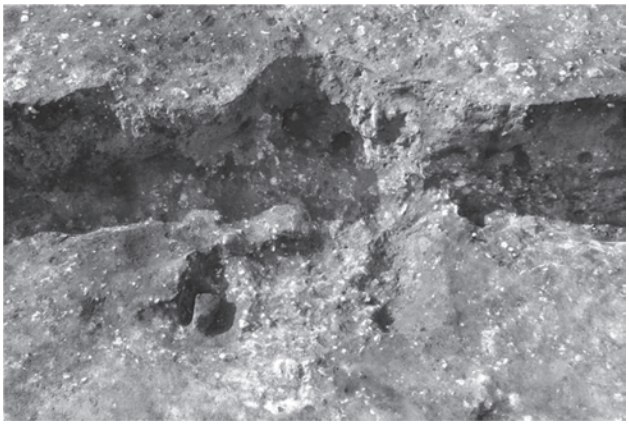
Ｈ１号住居址(南より)



Ｈ１号住居址掘方(南より)

図版四

Ｈ１号住居址カマド（南より）



Ｈ１号住居址カマド掘方

Ｈ１号住居址覆土堆積状況（東より）

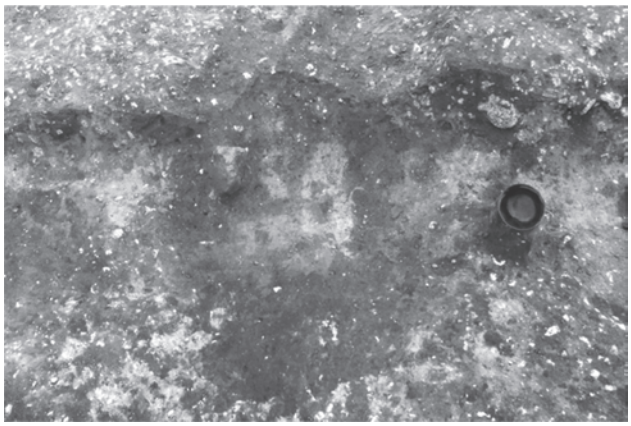
Ｈ１号住居址遺物出土状況（西より）

図版五

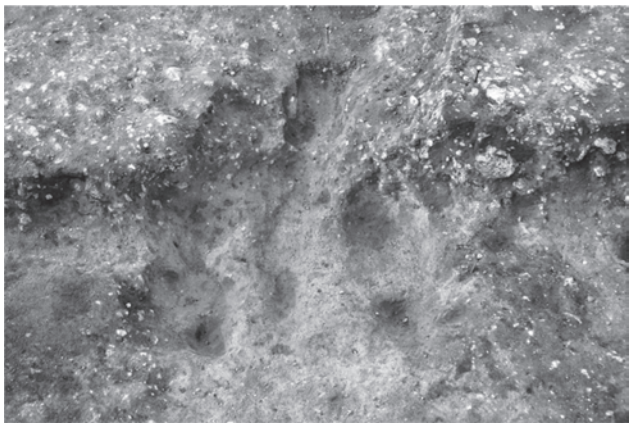
H２号住居址全景(南より)

H２号住居址掘方

H２号住居址覆土堆積状況



H２号住居址カマド



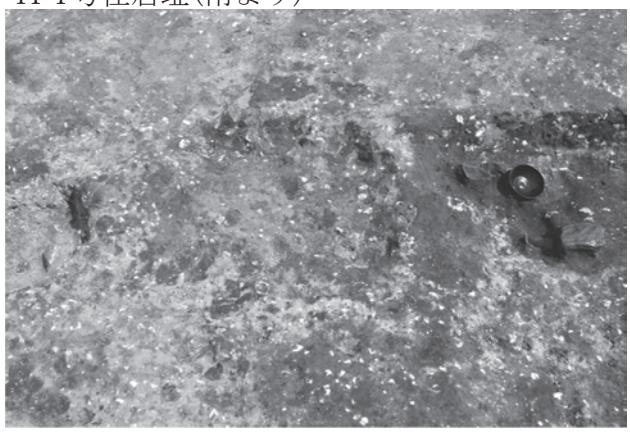
H２号住居址カマド掘方

図版六

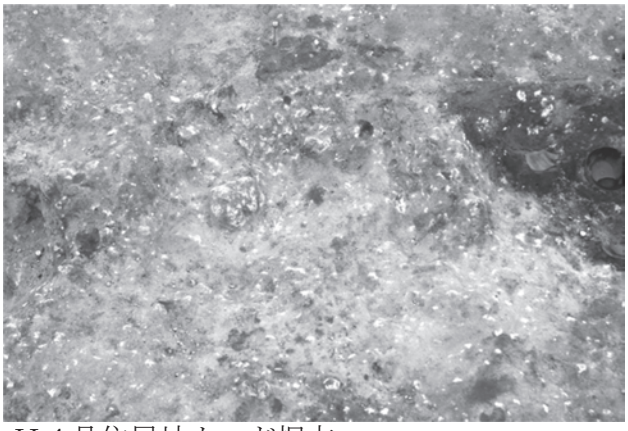
Ｈ３号住居址（南より）

Ｈ３号住居址覆土堆積土状況

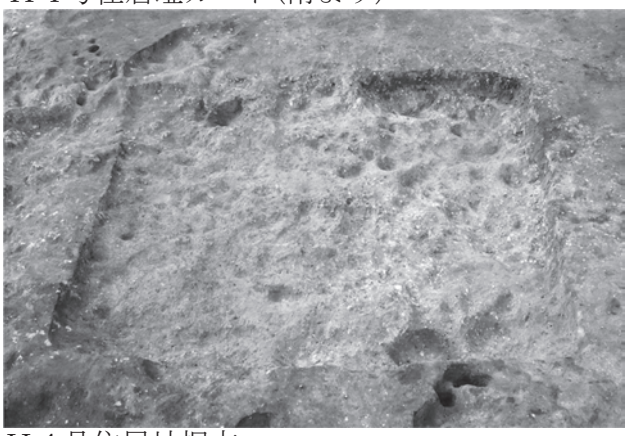
Ｈ４号住居址（南より）



Ｈ４号住居址カマド（南より）



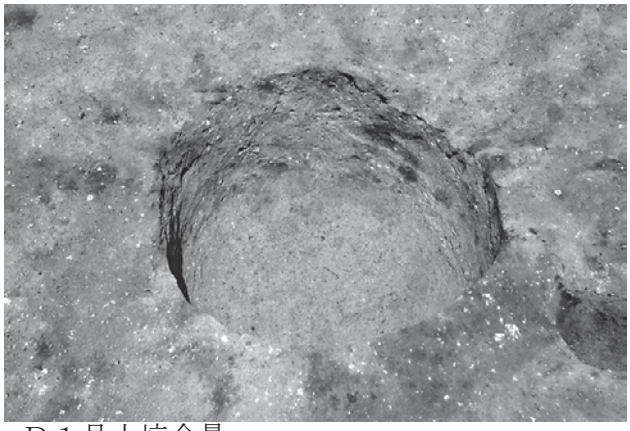
Ｈ４号住居址カマド掘方



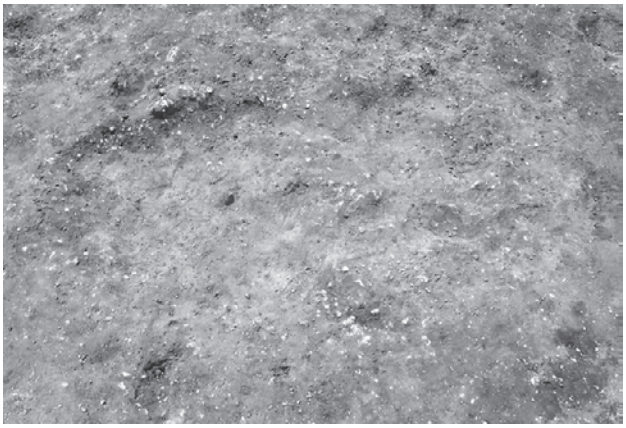
Ｈ４号住居址掘方

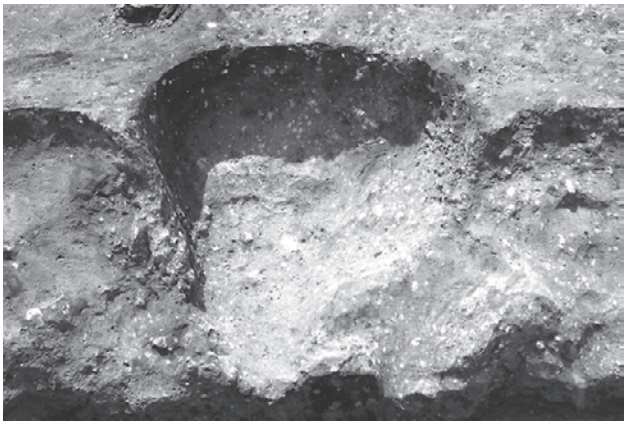
Ｈ４号住居址遺物出土状況（西より）

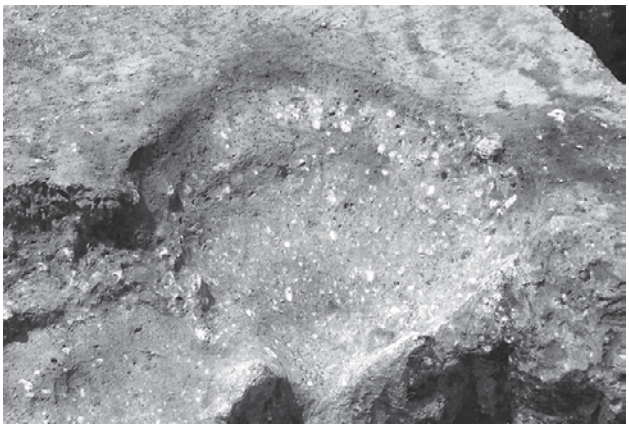
図版八

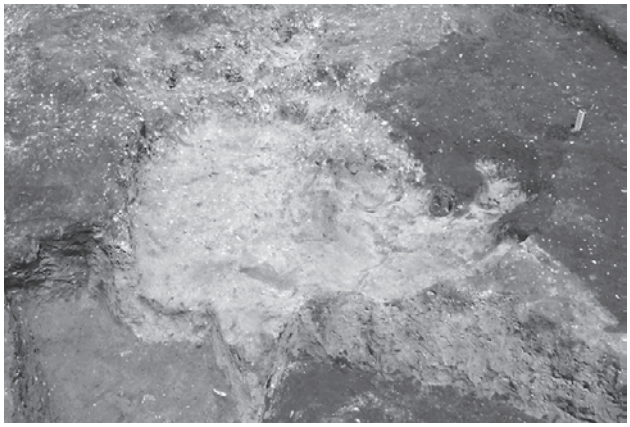

Ｄ１号土坑全景

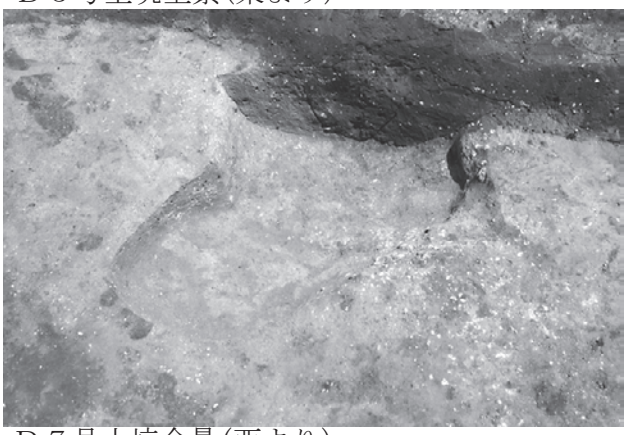
Ｄ２号土坑全景


Ｄ３号土坑全景

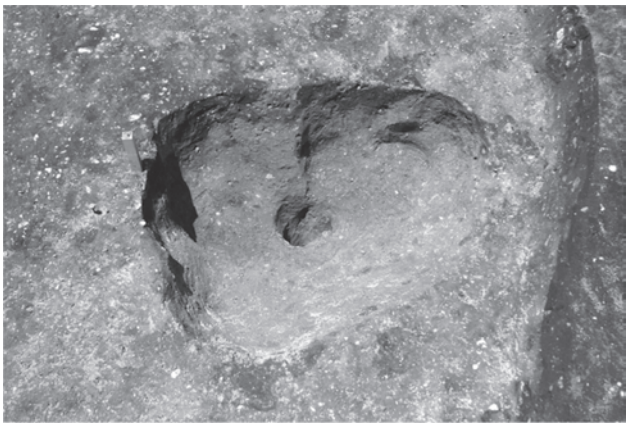

Ｄ４号土坑全景（東より）

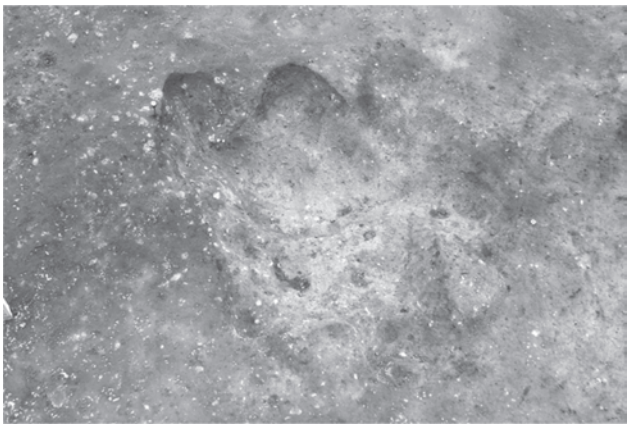

Ｄ５号土坑全景（東より）

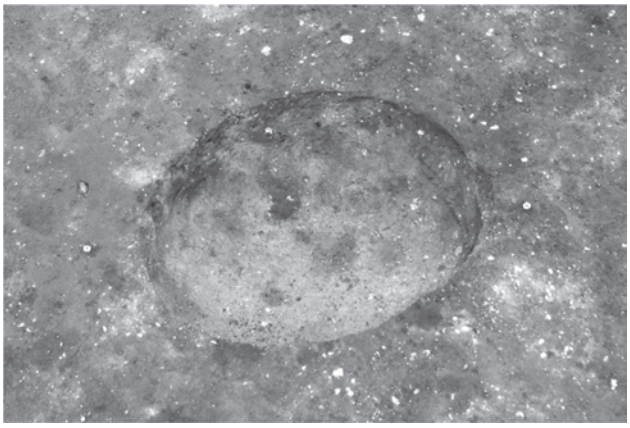

D6号土坑全景（南より）

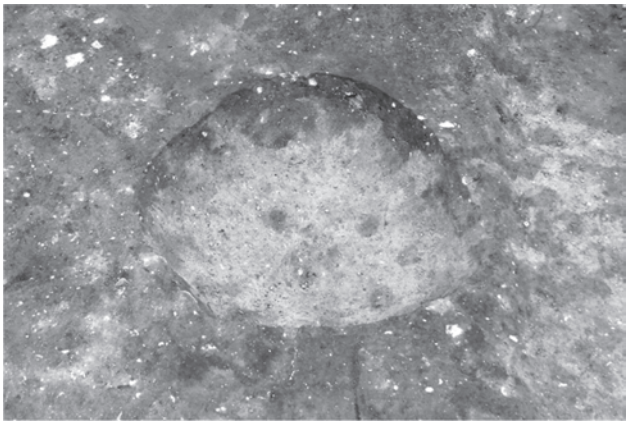

Ｄ７号土坑全景（西より）

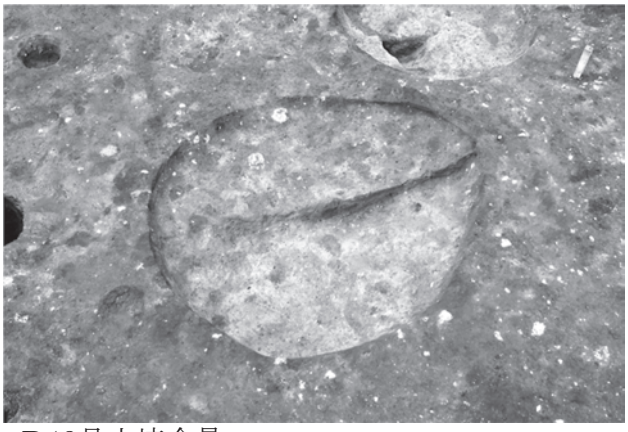
Ｄ８号土坑全景（北より）

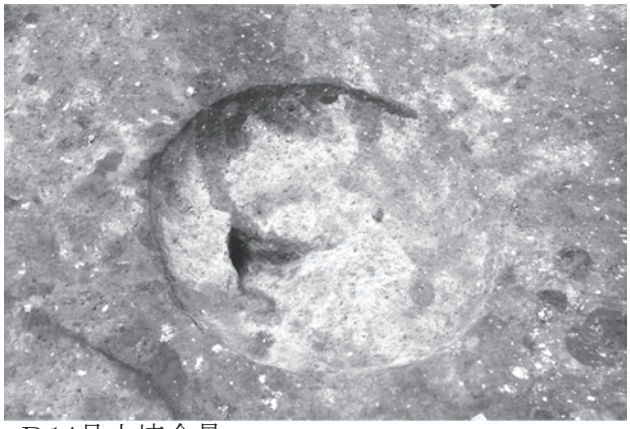

Ｄ９号土坑全景

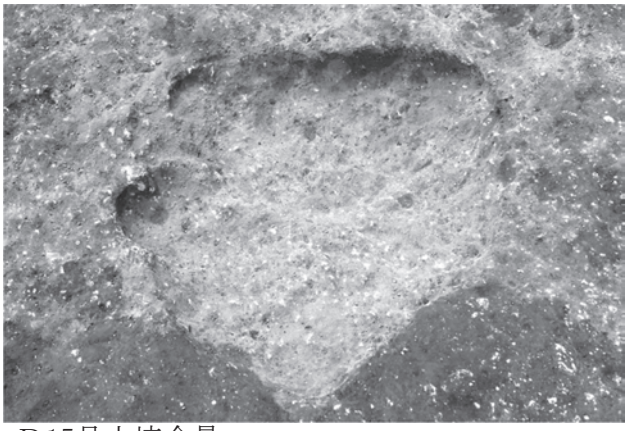

Ｄ10号土坑全景

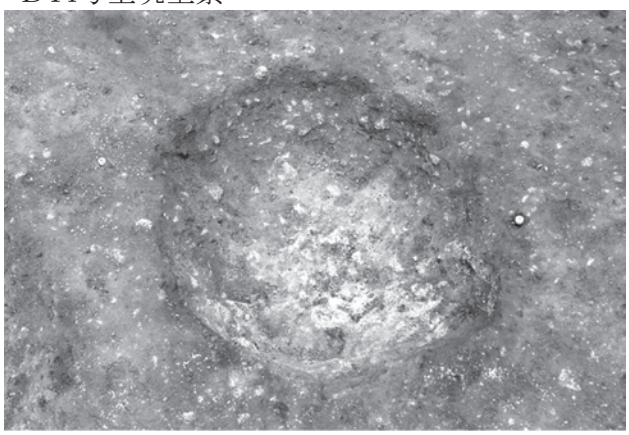

Ｄ11号土坑全景


Ｄ12号土坑全景

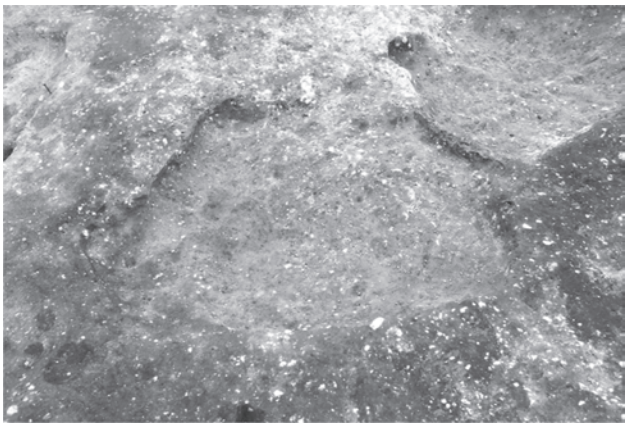

Ｄ13号土坑全景

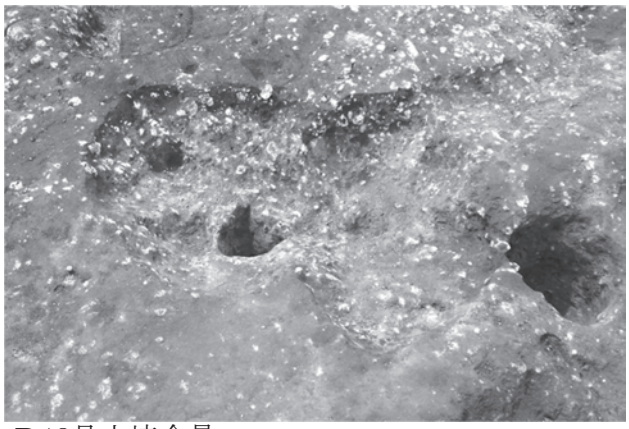

Ｄ14号土坑全景

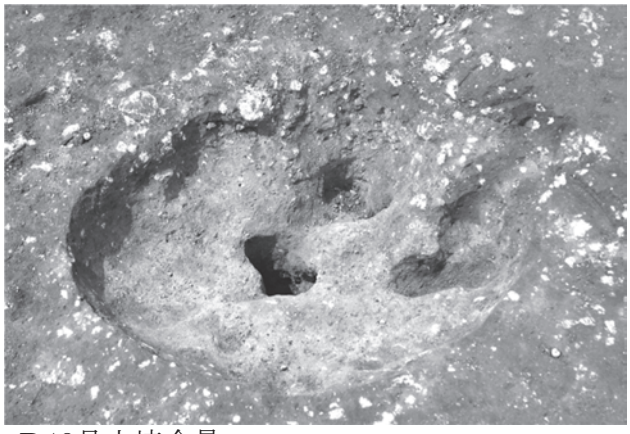

Ｄ15号土坑全景

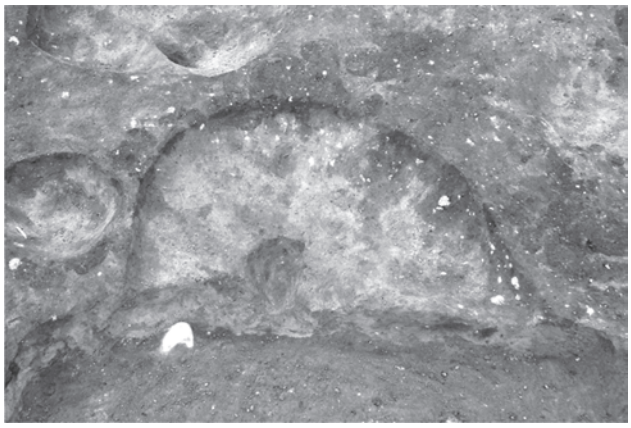

Ｄ16号土坑全景

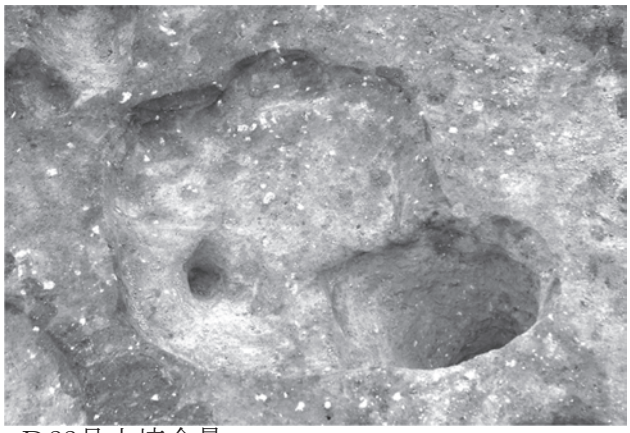
図版十

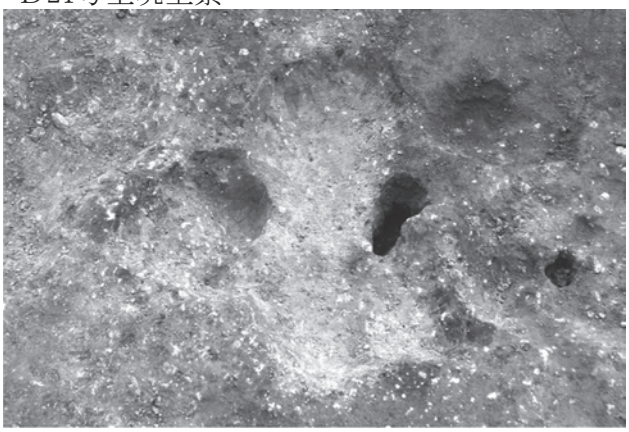

D17号土坑全景

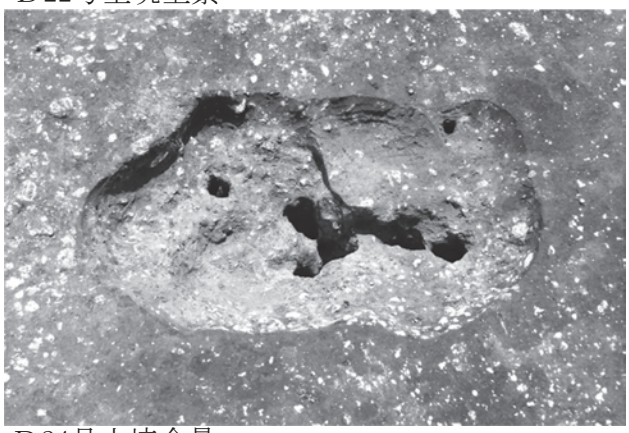

D18号土坑全景

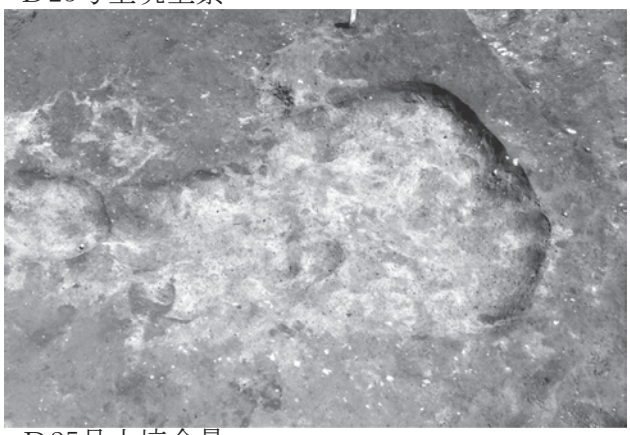

D19号土坑全景

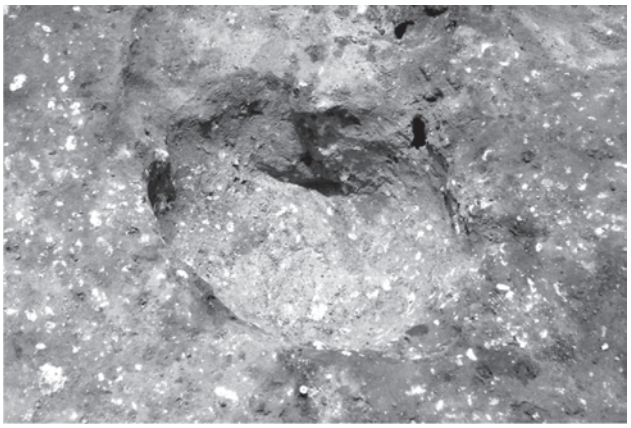

D21号土坑全景


D22号土坑全景

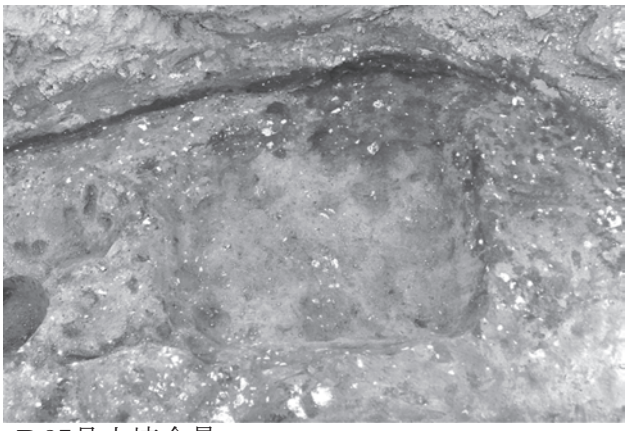

D23号土坑全景


D24号土坑全景


D25号土坑全景

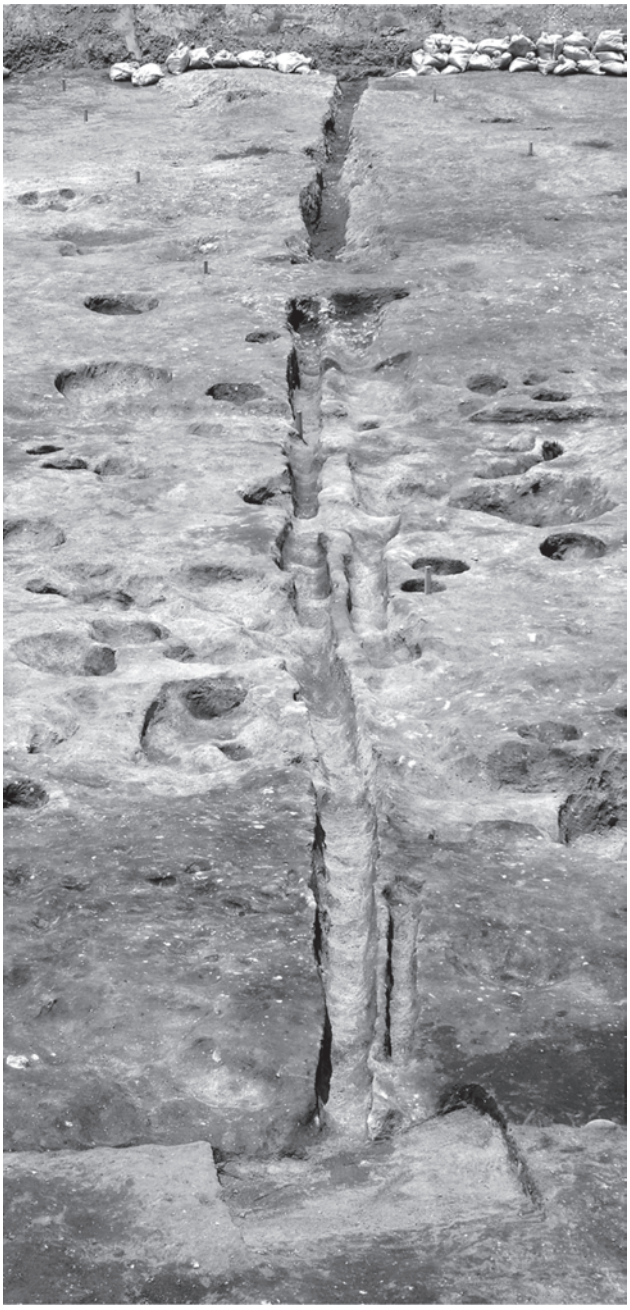


D26号土坑全景



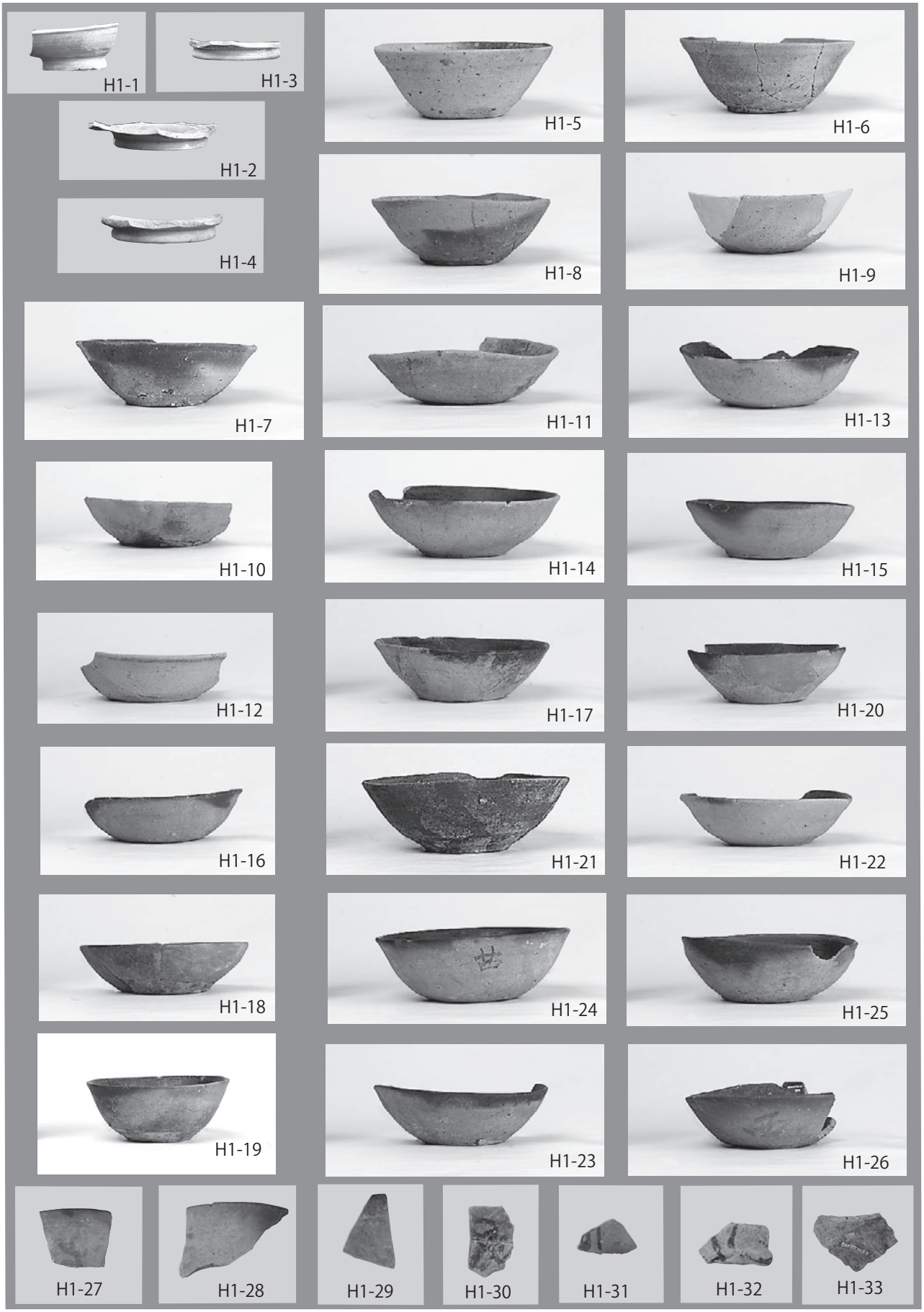
D27号土坑全景

M１号溝状遺構（南より）

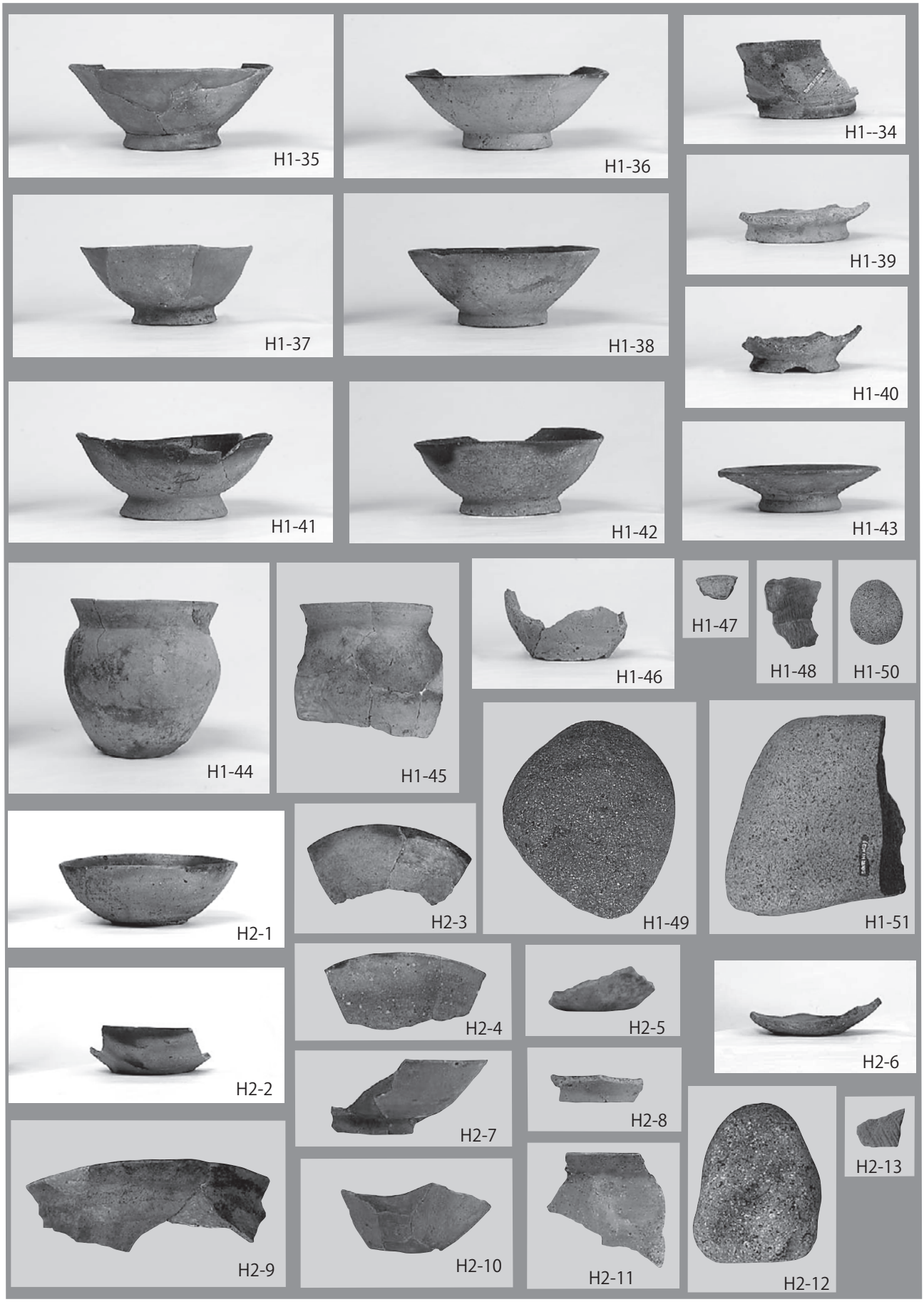


M３号溝状遺構（東より）

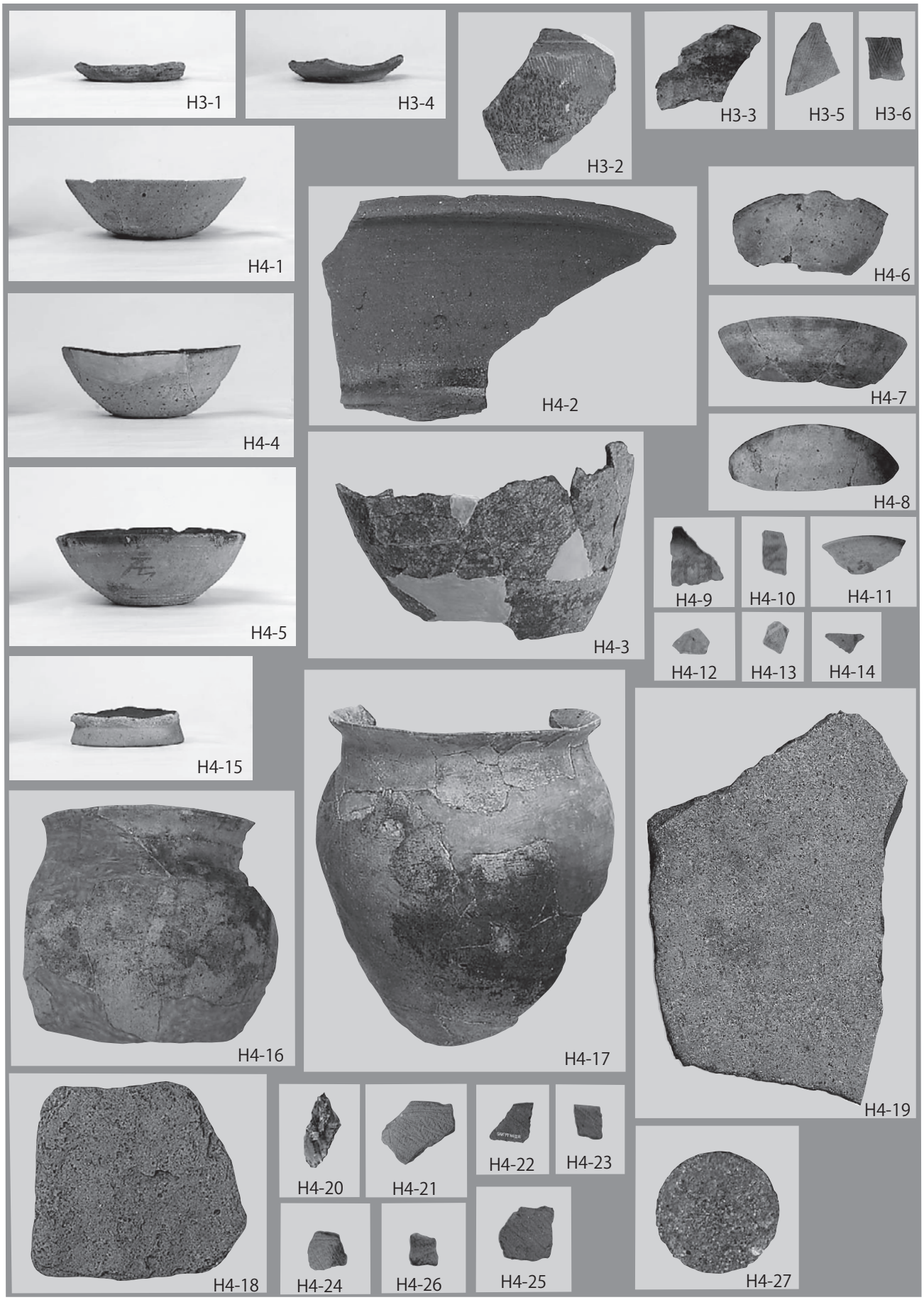
図版十二


H1-1
H1-3
H1-5
H1-6
H1-2
H1-8
H1-9
H1-4
H1-7
H1-11
H1-13
H1-10
H1-14
H1-15
H1-12
H1-17
H1-20
H1-16
H1-21
H1-22
H1-18
H1-24
H1-25
H1-19
H1-23
H1-26
H1-27
H1-28
H1-29
H1-30
H1-31
H1-32
H1-33

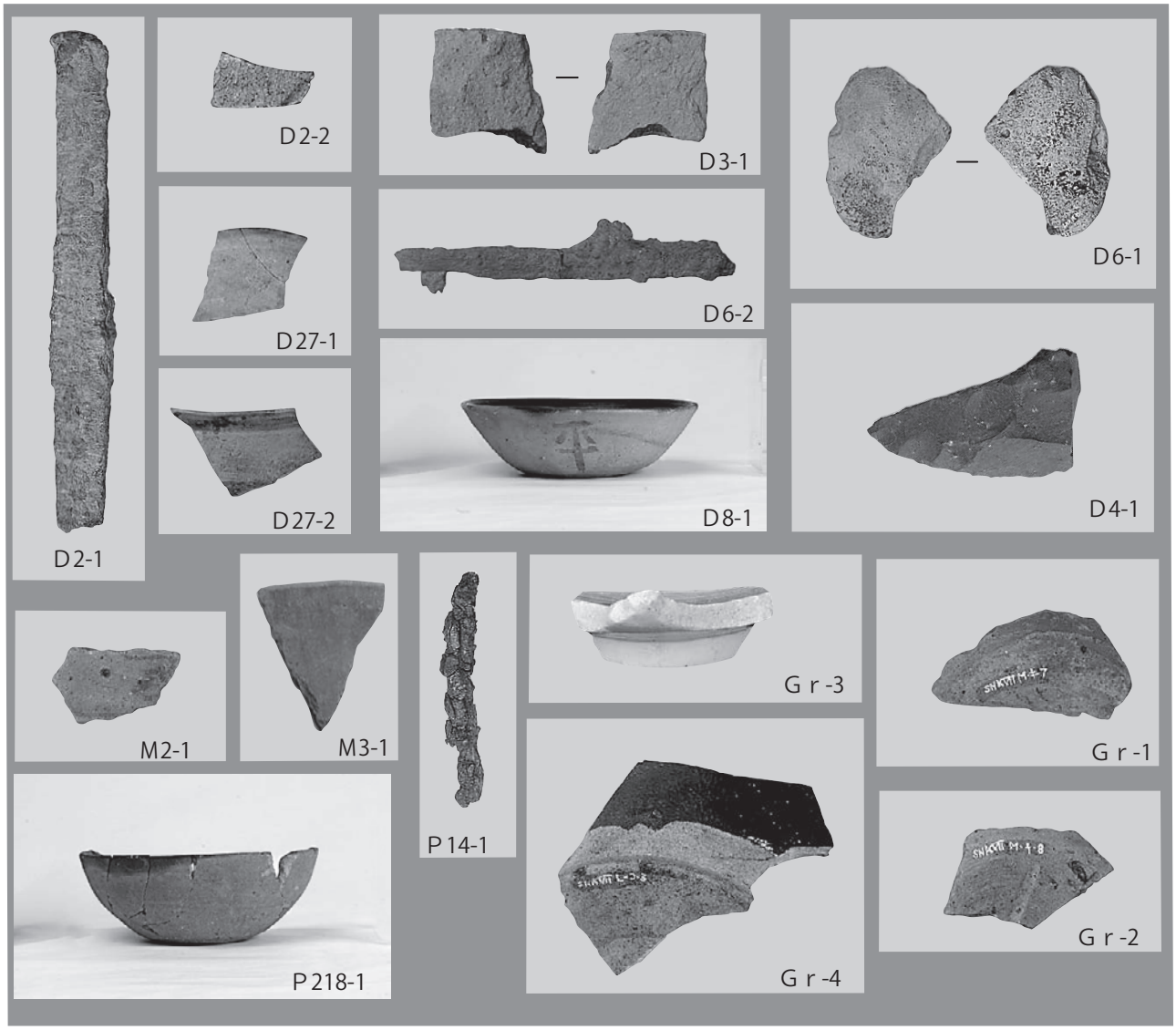
図版十三


H1-35
H1-36
H1--34
H1-39
H1-37
H1-38
H1-40
H1-41
H1-42
H1-43
H1-44
H1-45
H1-46
H1-47
H1-48
H1-50
H1-49
H1-51
H2-1
H2-3
H2-4
H2-5
H2-6
H2-2
H2-7
H2-8
H2-13
H2-9
H2-10
H2-11
H2-12

図版十四


H3-1
H3-4
H3-2
H3-3
H3-5
H3-6
H4-1
H4-2
H4-6
H4-7
H4-4
H4-8
H4-3
H4-9
H4-10
H4-11
H4-5
H4-12
H4-13
H4-14
H4-15
H4-16
H4-17
H4-19
H4-18
H4-20
H4-21
H4-22
H4-23
H4-24
H4-26
H4-25
H4-27

図版十五



調査区全景(北より　遠方に立科・八ヶ岳連峰を望む)

報告書抄録

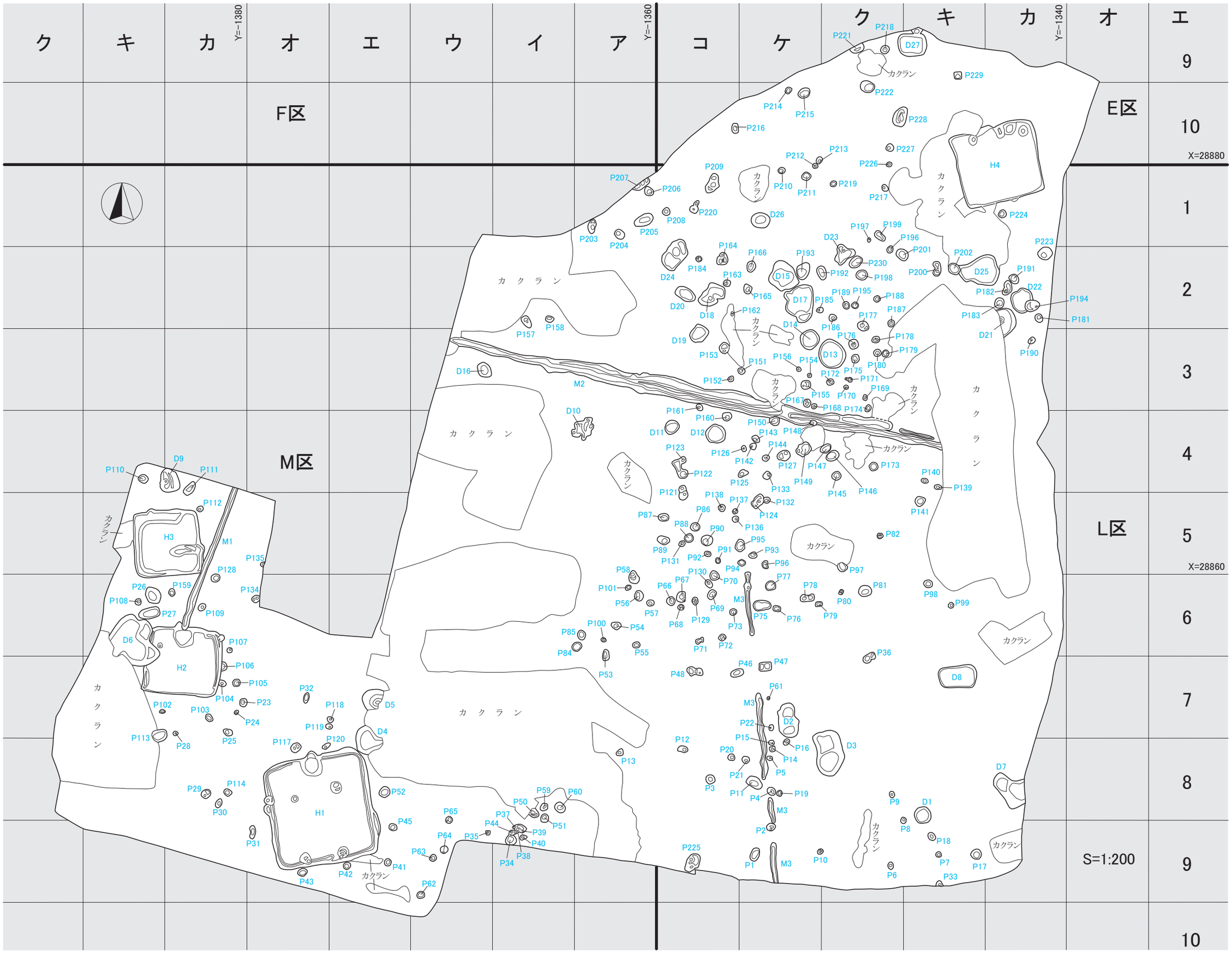
ふりかな	のまくぼいせきぐん　のまくぼいせきなな
書名	野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅶ
副書名	
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 259 集
編著者名	冨沢　一明
編集機関	佐久市教育委員会　文化振興課
所在地	長野県佐久市中込 2913　　ＴＥＬ 0267-63-5321　　FAX0267-63-5322
発行年月日	平成 31 年 (2019) 2 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
のまくぼいせきぐん のまくぼいせきなな 野馬窪遺跡群 野馬窪遺跡Ⅶ	さくしさるくぼ 佐久市猿久保 165-1　他	20217	122	36°15.36	138°29.05	20180507 ～ 20180629	1543	長野県立 武道館 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野馬窪遺跡群 野馬窪遺跡Ⅶ	集落址	平安	住居址　　4 軒 土　坑　　27 基 溝状遺構　　3 本	灰釉陶器・土師器・ 須恵器・石器・鉄製品	

要　約	台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に平安時代の竪穴住居址が検出された。中でもＨ１号住居跡からは、墨書土器やいわゆる「伊勢甕」と呼ばれる甕片が出土した。しかし、近隣の遺跡から検出されている中世関連の遺構は発見されなかった。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 259 集
野馬窪遺跡群　野馬窪遺跡Ⅶ
平成 31 年 (2019) 2 月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒 385-8501　長野県佐久市中込 3056
社会教育部　文化振興課　文化財事務所
〒 385-0051　長野県佐久市中込 2913
℡ 0267-63-5321
印刷所　双葉印刷



第５図　野馬窪遺跡Ⅶ調査全体図

第26図　野馬窪遺跡Ⅶ発掘調査図